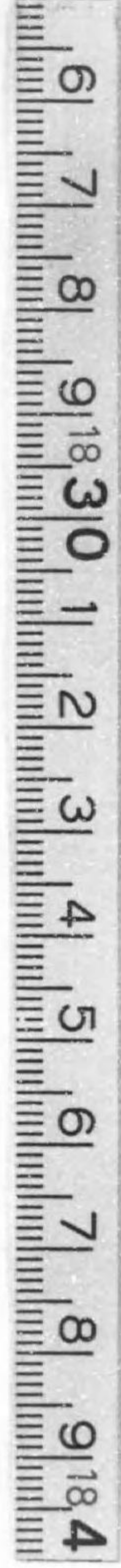


特 217

226

御臨幸記念誌



始



特 217
226



御臨幸記念誌

静岡縣立濱松工業学校
静岡縣濱松工業試験場



目次

知事題字

御寫眞(支園—講堂及び御座所—御親閲及び校場全景)

御親閲奉迎歌

御臨幸記念式々歌

校場長奏上案

天覽品一覽

天覽作業一覽

御巡路畧圖

御巡路ニ於ケル校長ノ御説明案

御臨幸所感

校場長

職員

助手、工手、職工等

在校生

卒業生

奉拜感激録

御臨幸記念事業

御臨幸餘記

御臨幸記念式式歌解説

奉迎日誌抄

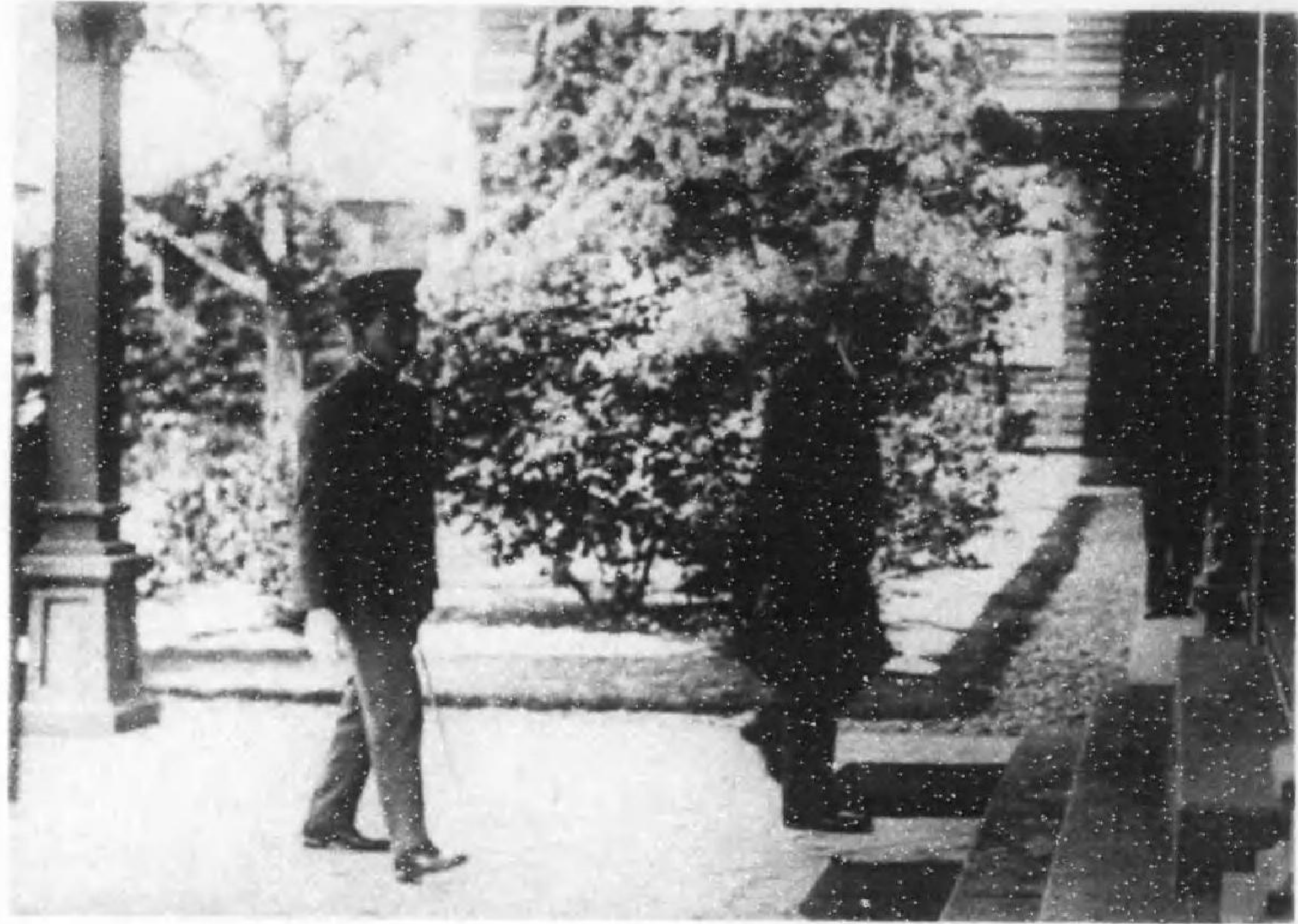
懸賞演工行進歌々詞當選者發表

本縣西部御親閲式の状況

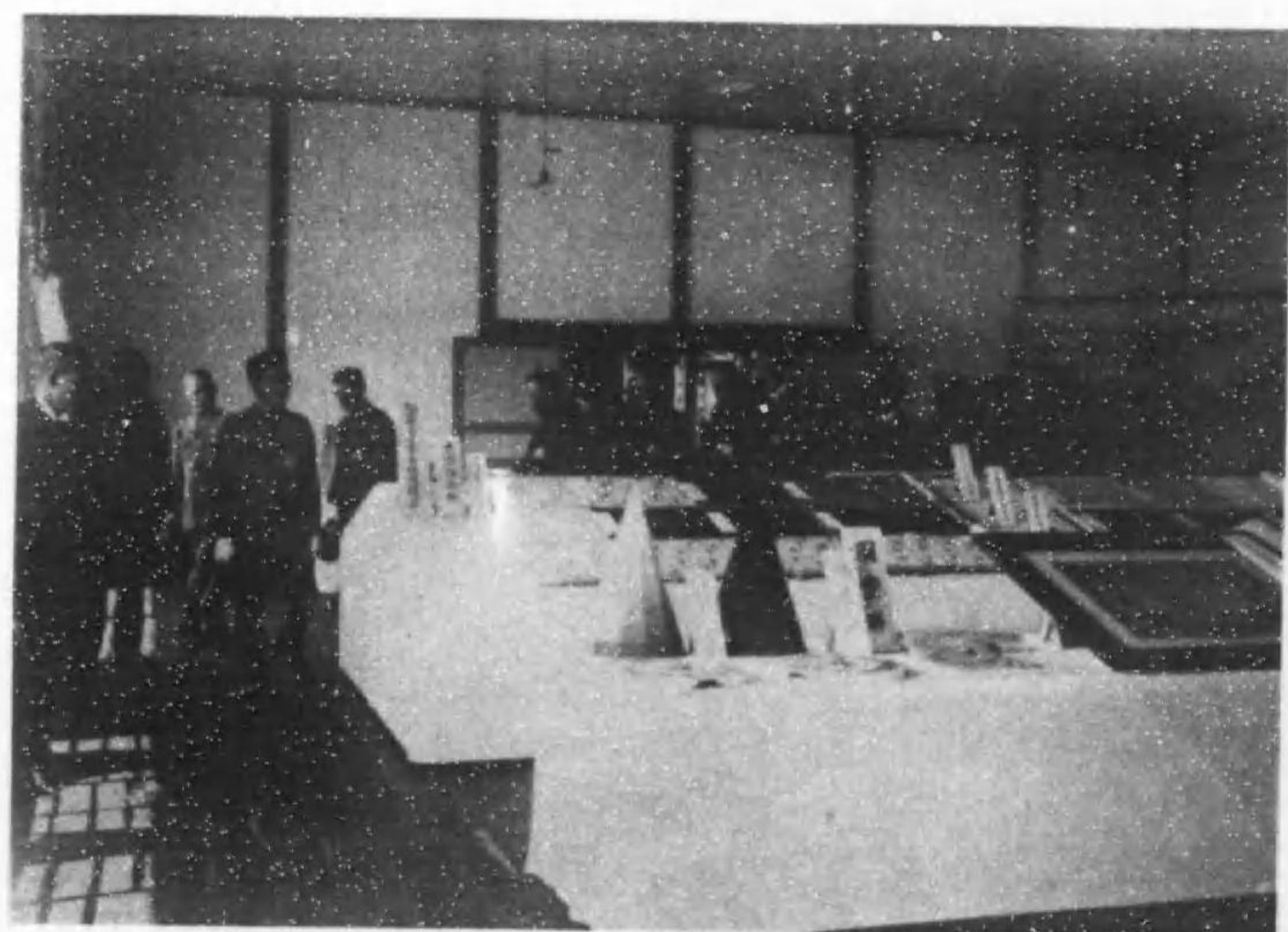
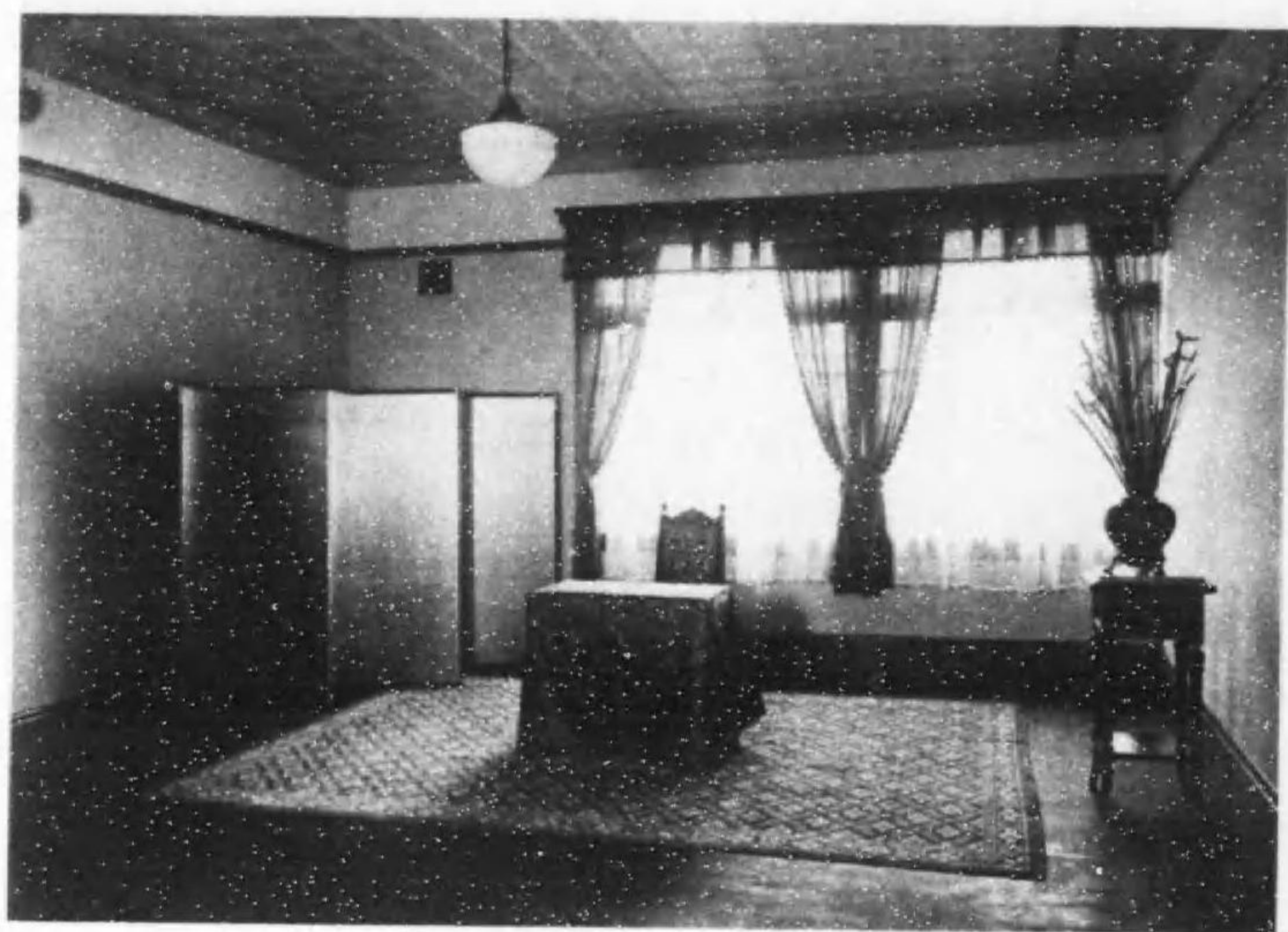
静岡縣下御巡幸御日程

御臨幸記念名簿

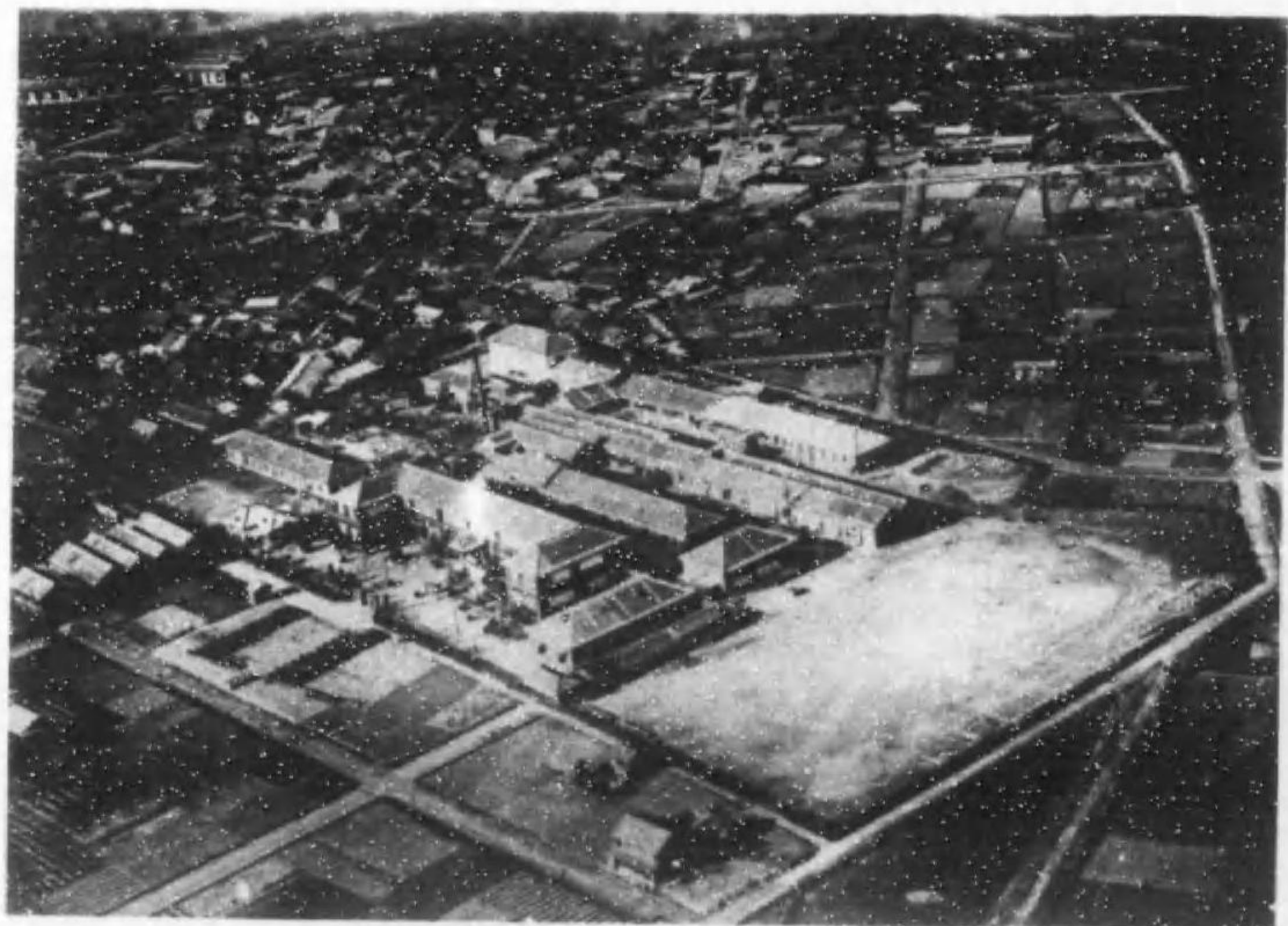
— 目次終り —



着御關立



(E) 御座所
(F) 講堂内御巡覽



(上) 御親閲(本校生徒)
(下) 校場全景(空中撮影)

静岡縣下御親閱奉迎歌

一、あまさかる ひなにはあれと
おほきみの 行幸迎へて
不二の嶺も いよささやけく
光そふ 縣の榮や

二、いさなとり 海にすなとり
山に狩る 賤かなりはひ
畏も みそなはします
すめろきの 大き御恵

三、久方の あまつみ日かけ
をろかみし けふの吉日を
語りつき 民草われら
とことには 仰かむ稜威

濱松工業學校御臨幸記念式式歌

第一章

高照らす吾日の御子
今し吾等の學舎に立たせ給へり
畏き御稜威に血潮たぎりて
現人神とをろがみまつる
嗚呼 日の本の皇帝 昭和の皇帝
迎へまつりし今日ぞ偲ばゆ

第二章

八隅知之吾大君
今し吾等の學舎に御影鎮もる
浴き御惠身ぬちに刻りて
學びの業をいよよ勵まむ
嗚呼 日の本の皇帝 昭和の皇帝
迎へまつりし今日に答へむ

校場長奏上案

- 一、最敬禮
- 一、當校並ニ工業試驗場ノ狀況ヲ申シ上ゲ度イト存ジマス。
- 一、當校ト工業試驗場トハ同一ノ敷地内ニ設置セラレ主タル工場ヲ共用シ職員モ亦一部ハ互ニ兼務トナツテ居リマス
圖面ニ於キマシテ御右下ハ學校デ御左上ハ試驗場デ其ノ中間ガ工場デ御座イマス。
- 一、當校ハ大正七年ノ創立デ御座イマシテ爾來工業界ノ進展ニ伴ヒ數回ノ改正ヲ加ヘマシテ現在デハ専門科ハ色染仕上科、紡織科、圖案科、建築科ノ四ツデ御座イマス。入學資格ハ尋常小學卒業ノ程度デ修業年限ハ五箇年デ御座イマス。
- 一、現在生徒數ハ約三百六十名デ卒業生ハ約五百名デ御座イマシテ就職其他卒業後ノ狀態ハ良好デ御座イマス。
- 一、當校ノ教育方針ハ道德教育ニ最モ重キヲ置キ、質實ニシテ勤勞ヲ好ムノ良風ヲ馴致致シマスルコトニ努メテ居リマス。
- 一、尙當校ニハ夜間ノ補習學校ガ併設セラレテ居リマス。
- 一、現在生徒數ハ約百五十名デ修業生ハ約千五百名デ御座イマス。
- 一、次ニ試驗場ハ明治三十九年ノ創立デ時代ノ進運ト相俟チマシテ數度改善ヲ加ヘ、現今デハ染色、機織、圖案、整理、能率ノ五部ニ分レテ居リマス。

一、現在試験場デハ輸出織物ニハ特ニカヲ注ギマシテ製作品ヲ海外ノ市場ニ試験的ニ販賣致シマシテ其報告ヲ取寄セ
 當業者ノ参考ニ供シテ居リマス。又將來有望ナル品種デ技術上經濟上當業者ニ於テ實行困難ナルモノニ對シテハ
 委託作業ヲ致シテ居リマス。尙能率増進ノ事業ハ現今我國ニ取リテ特ニ必要ト存ジマシテ此方面ニモカヲ注イデ
 居リマス。

一、本日ハ學校試験場共ニ平素ノ成績品ト實習及作業ノ實狀ヲ觀覽ニ供シタイト存ジマス。

一、最敬禮

天覽品

工業試驗場

染色部
 機織部
 整理部

- | | |
|---|---|
| 一、別珍製作順序
<small>(素地、剪毛、毛燒、染色、捺染、エムボツシング(壓型))</small> | 六 |
| 二、縞ボブリン製作順序
<small>(素地、晒、苛性整理、仕上)</small> | 四 |
| 三、綿縮製作順序
<small>(素地、シボ出シ、晒、仕上)</small> | 四 |
| 四、ビツケ製作順序
<small>(素地、晒、仕上)</small> | 三 |
| 五、南洋試賣品 | 五 |

- 六、カイロ試賣品
(人絹ポイレット、經糸捺染ポイレット、捺染綿布二點、捺染絹)
(捺染別珍、縮三ツ綾、服地、ポイル、シャツ地) 五點
- 七、南洋試賣品標本帳 一冊
- 八、染料選擇試驗原簿 二冊
- 九、配布標本 計 三十二點

圖案部

- 遠州織物意匠圖案ノ變遷 (六曲屏風半双仕立)
- 1. 大正五・六年 縮及緋 夏向 四點
 - 2. 大正八・九年 同 同 四點
 - 3. 大正十二・十三年 同 同 四點
 - 4. 昭和二・三年 模様及緋 同 二點
 - 5. 昭和四・五年 模様 同 六點
- 計 同 同 同 同 冬向 四點
同 同 同 同 同 四點
同 同 同 同 同 四點
同 同 同 同 同 四點
同 同 同 同 同 四點
計 四十點

能率部

- 一、作業配置ノ研究 一點
 - 1. 作業配置ノ變更ト運搬距離ノ縮少圖表
- 二、電燈ノ高サノ研究 二點
 - 1. 電燈ノ高サノ研究圖表
 - 2. 呎燭計
- 三、軸線ノ偏倚研究 二點
 - 1. 軸線ノ偏倚研究圖表
 - 2. 軸線測定器
- 四、適性検査器 (能率試験室陳列) 十九點
 - 1. 反應検査器
 - 2. 作業速度検査器
 - 3. 技能學習力検査器
 - 4. 手頭速度検査器
 - 5. 握力検査器
 - 6. 聽力検査器
 - 7. 視觸覺辨別検査器

8. 空間辨別検査器
9. 光度辨別検査器
10. 觸覚検査器
11. 記憶力検査器
12. 撰擇力検査器
13. 注意力検査器
14. 構成力検査器
15. 狙準動作検査器
16. 時間知覚検査器
17. 色盲検査表
18. 形状辨別速度器
19. 工夫力検査器

工業學校

色染仕上科

- 一、捺染法ノ様式三種
(直接捺染法、拔染法、防染法)

點 點 點 點 點 點 點 點 點 點 點

計 二十四點

三 點

- 二、マンガン拔染絣
(原糸、交織布、印捺布、製品)
- 三、大島式拔染絣
(染糸、交織布、印捺布、製品)
- 四、綿布化學加工品 (透シ模様)
(素地、印捺、苛性處理、染色製品)
- 五、同 (擬錦紗)
- 六、大典 絞
(素地、苛性及二硫化炭素處理、染色製品)
- 七、試染標本帳
(素地、皺縮、染色、製品)
- 八、捺染物製作順序

紡 織 科

- 一、解織製織順序
(經卷ビーム、拔染ビーム、織上品、仕上品)
- 二、實習製作品

四 點
四 點
四 點
三 點
四 點
四 點
四 點
一 冊
計 二十八點

四 點
十一 點

圖案科

一、配色計
二、日本畫

1. 運筆練習

(第一學年)

二點

七一
點組

三、荒妙、和妙
四、佛蘭西萬國工藝品博覽會賞狀
五、神機織殿 (紡織科工場前)

1. 白及捺染綿紹

二點

一箱

2. 糸錦帶地

二點

一箱

3. 織出シ額面

一點

一點

4. 霜降夏服地

一點

一點

5. 富士絹

一點

一點

6. ヌナル

一點

一點

7. 靴下

二點

一點

8. 織物分解帳

二點

一點

計

十八點

三、西洋畫

1. 植物寫生
2. 絹本製作

(第二學年)
(第三學年)

三點
二點

九點

四、染織基本圖案ノ進度

1. 藤ノ寫生 (第一學年)
2. 便化 (第一學年)
3. 充墳模様 (第一學年)
4. 散墳模様 (第一學年)
5. 二方連續模様 (第一學年)
6. 四方連續模様 (第一學年)
7. 絣圖案 (第二學年)
8. 縞圖案 (第二學年)
9. セル圖案 (第二學年)
10. ネル圖案 (第二學年)

一點
一點
二點
二點
一點
二點
二點
二點
二點
二點

二十二點

建築科

五、染織應用圖案 (第三學年)

- 11. 半襟圖案 (第二學年)
- 12. 友禪圖案 (第二學年)
- 13. 裾模様圖案 (第二學年)
- 1. 友禪着尺圖案
- 2. 友禪片側帶圖案
- 3. 古代模様 (桃山時代) 應用友禪片側帶圖案
- 4. 古代模様 (徳川時代) 應用裾模様圖案
- 5. 古代模様 (エジプト) 應用袂紗圖案
- 6. 支那向輸出更紗圖案

九點

一、製圖 (第一學年)

- 1. 線練習圖
- 2. 地業圖
- 3. 床組圖
- 4. 戸袋圖、階段圖

十點

二、製圖 (第二學年)

- 5. 庇圖
- 6. 床間透視圖
- 7. 矩計圖
- 8. 和風住宅断面圖
- 9. 和風住宅立面圖
- 10. 和風住宅平面圖

八點

三、製圖 (第三學年)

- 1. 洋風住宅立面圖
- 2. 洋風住宅平面圖

十一點

計 四十七點

- 3. 鐵骨小屋組圖
- 4. 力學圖解圖
- 5. ビルヂング詳細圖
- 6. 設計完了練習圖 (仕様書及見積書添附)
- 7. 卒業設計立面圖
- 8. 卒業設計平面圖
- 9. 卒業設計透視圖
- 10. 卒業設計詳細圖

四、標本家屋 (本館前)

試驗場點數合計 九十六點
 學校點數合計 百二十三點
 點數總計 二百十九點

— — — — —
 點 點 點 點 點 點 點

一棟
 計 三十點

天覽作業

工業學校

色染仕上科

一、捺染工場

- 1. 型紙式捺染 酸性染料配合色捺染
- 2. 機械捺染 鹽基性染料羊毛捺染

二、試染工場

教諭 村上作兵衛
 同 鹿山正朔
 助手 穴原勝房
 第五學年生徒 九名
 同 二名

教諭 井上義包
 同 古川英一
 助手 原野谷嘉平太

1. 染料(メチルヴァイオレット)製造實驗
2. 酸性染料絹染
3. 鹽基性染料木綿染

三、整理工場

1. 別珍「エムボッキング」
2. 晒「ホプリン」ノ幅出
3. 着尺セル地ノ「フェルトカレンダー」仕上
4. 晒「ホプリン」ノ「マーセリゼーション」(苛性仕上)

工手 鈴木 邦夫
同 勾坂 一次

第五學年生徒 一名
第四學年生徒 十三名
第三學年生徒 五名

第四學年生徒 一名
同 一名
同 一名
第五學年生徒 一名

紡織科

一、力織機工場

1. 原田式タオル織機

タオル製織

教諭 平川 秀五郎
同 中川 義一
同 内田 嘉吉
第五學年生徒 一名

二、撚糸工場

2. ルーチー自動織機(スイス製) 霜降夏服地製織
3. ノースロップ自動織機(米國製) 敷布製織
4. 特許坂本式自動織機 金巾製織
5. 豐田自動織機 富士絹製織
6. 鈴政式二挺杆織機 整經捺染製織
7. 鈴政式小幅織機 セル製織
8. 原田式小幅織機 セル製織
9. 廻轉式抒箱附織機 セル製織
10. 矢澤式等速管巻機

助手 大角 勇

1. ファンシーヤーン(撚絹糸)ノ撚糸
2. 霜降夏服地整經
3. セル整經
4. 木綿糸ノ繰返
5. 揚 粹

第五學年生徒 二名
同 工手 木村 ちか
第五學年生徒 一名
第四學年生徒 四名
第五學年生徒 一名

三、手織工場

1. 糸錦襖紗製織
2. 博多丸帶製織
3. 織出シ額面製織
4. 大柄絳座蒲團地製織
5. 解織製織
6. 銘仙夜具地製織
7. 八端織製織
8. 兒服地製織
9. セル製織

圖 案 科

圖案實習室

教 諭 泉 頭 讓
 助 手 吉 田 伊 三 郎
 同 金 原 は ぎ

第四學年生徒 二 名
 同
 同
 第三學年生徒 一 名
 同
 同
 同
 同
 同
 同
 同
 同 四 名

教 諭 相 生 垣 貫 二
 助教諭心得 坂 井 輔 三

工 手 大 城 貞 夫

1. 塑型製作
2. 基本圖案 三角形充填及圖案構成器應用圖案
3. 染色圖案 友禪片側帶圖案
4. 印刷圖案 カット圖案

第二學年生徒 八 名
 同 七 名
 第三學年生徒 六 名
 同 四 名

建 築 科

一、第一製圖室

教 諭 大 井 宗 一
 助 手 森 下 喜 久 男

住宅設計製圖

第三學年生徒 二十 名

二、建築實習室

教 諭 榑 原 助 太 郎

軸部工作

第二學年生徒 十五 名

三、建築作業場

助 手 大 村 左 近

基礎工事

第二學年生徒 六 名

四、建築試験室

1. 「セメント」試験
 - セメント供試體作製
 - セメント比重試験
 - セメント凝結試験
 - セメント膨脹性龜裂試験
 - セメント耐張性試験
2. 「コンクリート」試験
 - コンクリート供試體作製
 - コンクリート耐壓試験
 - コンクリート軟度試験 (スランブ試験・フロー試験)

第三學年生徒四名及第二學年生徒四名

教諭 中江 齊
工手 鳥羽 山正 一

第三學年生徒四名及第二學年生徒四名

工業試験場

染色部

一、染色工場

1. 染槽 建築々料綿糸染色
2. 二重釜 クレープ染色
3. 布染機 ホブリン染色

技師 平澤 政吉

職工 名波 國治

第四學年生徒 一名

第四學年生徒 一名

二、試験室

1. 遠州織物染色堅牢度試験 (夏物)
2. 直接染料染色試験

助手 波邊 馨
傳習生 高林 茂吉

三、漂白工場

1. 「ウォーターマングル」晒ホブリン加工
2. 洗濯機 晒クレープ皺取作業
3. 繩狀水洗機 ホブリン水洗
4. 壓力精練釜 ホブリン精練

技手 坂本 至

職工 岡野 武夫

第五學年生徒 一名

第四學年生徒 一名

職工 寺田 英一

第四學年生徒 一名

力織機工場

機織部

技師 坂本 相敬

1. 野上式片側四挺杼織機 兒服地製織
2. 野上式織機ジャカード機附 紋織兒服地製織
3. 豊田式小幅織機ドビー機附 着尺地製織
4. 平野式兩側二挺杼小幅織機 壁糸應用夏着尺地製織
5. 豊田式管券機

整理部

整理工場

技手

岡村 與

1. 別珍ノ「エムボツシング」
2. 晒「ホプリン」ノ幅出
3. 着尺セル地ノ「フェルトカレンダー」仕上
4. 晒ホプリンノ「マーセリゼーション」(苛性仕上)

圖案部

圖案調製室

技手

岡尾 嘉美
助手 伊藤 喜好

織物圖案調製 (夏向解織、中形等圖案)

職工 池谷 正雄
同 峰野 幸貞
傳習生 高部 文平

能率部

能率試驗室

技師

栗原 信衛

「エネルギー」代謝試験

技手 寺田 武夫
職工 稻垣 銀藏
同 鈴木 幸貞
同 大橋 幸貞

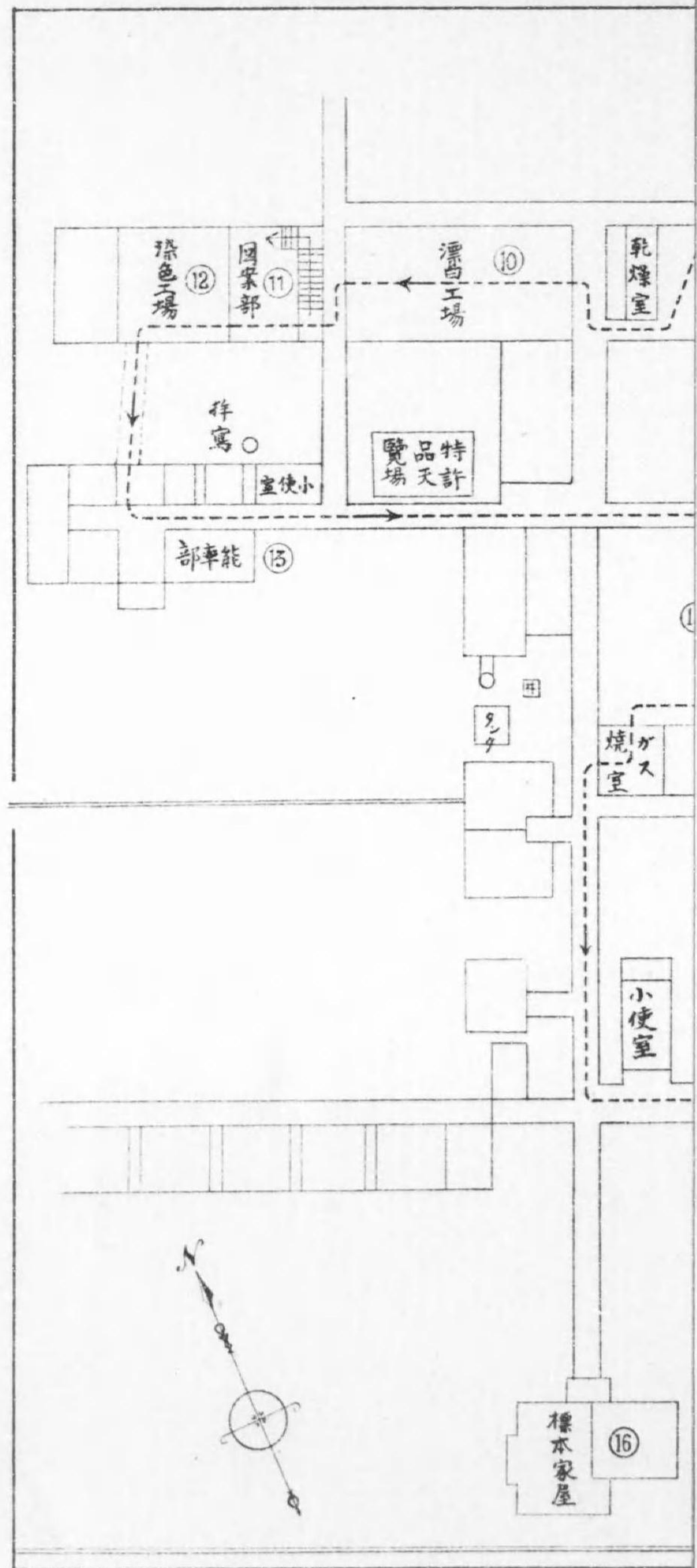
汽罐室

學校教諭技手

岩谷 一學
職工 富田 助市

修繕室

學校助手 小川 定



御巡路ニ於ケル校場長ノ御説明案

- 一、此レハ圖案科第二學年ト第三學年ノ實習デ御座イマス。第二學年ノ方ハ塑型ト圖案構成機ノ使用法ヲ研究致シテ居リマス。第三學年ノ方ハ友禪ト「カット」ノ圖案ヲ描イテ居リマス。
- 一、此ノ室ニハ學校ト試驗場ノ製作品ヲ陳列致シテ御座イマス。
- 一、是カラ試驗場ノ製品デ御座イマス。
- 一、此レハ當地デ多量ニ生産致シマスル別珍ノ製作順序デ御座イマス。
- 一、此レハ「ポプリン」デ輸出綿布トシテ主要ナモノデ御座イマス。高級綿布ニ屬スルモノデ英國品ニ對抗シテ成功致シマシタモノデ御座イマス。
- 一、此レハ縮ト「ピッケ」ノ織卸シト仕上品トノ對照デ御座イマス。
- 一、此レハ「スラバヤ」ニ於テ試驗的ニ販賣ヲ致シマシタモノ、一部分デ御座イマス。
- 一、此レハ意匠圖案ノ變遷ヲ示シタモノデ御座イマス。大正八九年頃ハ大變ケバケバシイモノガ流行致シマシタ。昭和二三年ニハ外國資料ヲ取入レマシタハデナ模様物ガ流行シタノデ御座イマスガ近來非常ニ落付キ且マトマツテマイツタノデ御座イマス。意匠圖案ノ變遷ハ時代人心ノ反映デアリマシテ之ヲ通ジテ人心ノ歸趨ト技術ノ進歩トヲ窺フノハ興味アルコトト存ジマス。
- 一、此レハ市販ノ多數ノ染料中ヨリ良好ナモノヲ選擇シマシテ當業者ニ發表致シマシタモノデ御座イマス。

一、此レハ能率ノ仕事ノ一例デ御座イマス。此レハ作業配置ノ變更ニヨリ運搬距離ヲ縮少シ得ク實例デ御座イマス。此レハ電燈ノ吊方ノ研究ニヨリマシテ燭力ノ利益ヲ擧ゲマシタ一例デ御座イマス。此レハ車軸ノ偏倚ノ修正ニヨル動力ノ節約ノ實例デ御座イマス。是レカラ學校ノ方デ御座イマス。

一、此レハ色染仕上科ノ成績品デ御座イマス。

一、此レハ捺染法ノ三様式デ御座イマス。

一、此レハ酸化ト還元作用ノ應用ニヨツテ作りマシタ白緋ト黒緋デ御座イマス。

一、此レハ木綿ヲ化學的ニ變質セシメテ特殊ノ手觸リヲ有スルモノトシタモノデ御座イマス。

一、此レハ絞ヲ機械的ニ作りマス方法デ御大典後大變流行致シマシタモノデ御座イマス。

一、此レハ試染標本帳デ御座イマス。

一、是カラ紡織科ノ成績品デ御座イマス。

一、此レハ目下和服地トシテ流行致シテ居リマスル解織ノ製作順序ヲ示シタモノデ御座イマス。

一、此レハ各學年ノ實習製作品デ御座イマス。土地柄木綿織ヲ主ト致シテ居リマス。

一、此レハ御大禮ノ際學校デ謹製致シマシテ皇大神宮並ニ明治神宮ニ奉納致シマシタ古代ノ荒妙、和妙デ御座イマス。

一、コレハ先年佛國萬國工藝品博覽會デ受領致シマシタ賞狀デ御座イマス。

一、此レハ圖案ノ進度ヲ示シタモノデ御座イマス。基本練習ト致シマシテ寫生カラ始メマシテ便化、充填、連續ノ順序ニ進ミ終ニ應用圖案ヲ課スルノデ御座イマス。此ノ三ツハ古代模様ヲ現代ニ應用致シマシタモノデ御座イマス。上ノ方ハ左ニ向ツテ自在畫ノ進度デ御座イマス。運筆ト配色ノ練習トシテ教育致シマス。

一、此レハ建築科ノ製圖ノ進度デ御座イマス。第一學年ハ和風建築ノ製圖デ御座イマス。第二學年ハ木造洋風構造ヲ

主トシタ製圖デ御座イマス。第三學年ハ木造ノ獨立設計ト鐵筋鐵骨構造デ御座イマシテ最後ニ卒業設計トシテ相

當大キナ建築ノ設計ヲ完成サセマス。

一、コチラハ學校ト試驗場ト共用ノ織工場デ御座イマス。

一、コチラハ小巾デ内地向ノ着尺デ御座イマス。

一、コチラハ準備工場デ御座イマス。働イテ居リマスノハ大部分紡織科ノ第五學年ト第四學年生デ御座イマス。

一、右側ノ列ハ自働織機デ御座イマシテ、手前カラ瑞西製、アメリカ製、濱松ノ阪本式、名古屋ノ豊田式ノ順序デ御座イマス。今日デハ日本製ハ決シテ外國製ニ劣リマセン。價格モ遙カニ安イノデ御座イマス。自働織機ハ緯糸ガ切斷致シマシタリ無クナツタリシマシタ時ニ自働的ニ供給スル仕掛デ御座イマシテ管ヲ替ヘル裝置ト杼ヲ替ヘル裝置ト御座イマス。經糸ガ切レマシタ時ニハ自働的ニ停止致シマス。

一、コチラハ管ヲ替ヘル方デ御座イマス。

一、コチラハ杼ヲ替ヘル方デ御座イマス。

今日普通ノ力織機デハ工女一人デ八臺持テ御座イマスガ、自働織機デハ一人デ四十五臺モ運轉致シテ居ルノデ御座イマス。

一、コチラハ手織工場デ御座イマス。第四學年第三學年ノ實習デ御座イマス。今日デハ木綿ト致シマシテハ手織ハ實地ニハ入用ガ御座イマセンガ教育ノ順序トシテ課シテ居ルノデ御座イマス。

一、此レハ織殿デ御座イマス。先程御目ニ掛ケマシタ荒妙、和妙ヲ織リマスタメニ古代ノ風ニ建テタモノデ御座イマス。

一、是レカラ建築科デ御座イマス。

此レハ第三學年ノ製圖デ御座イマシテ住宅設計ヲ致シテ居リマス。

一、コチラハ木工場デ第二學年生ノ作業デ御座イマス。右ハ同二學年生ノ鐵筋混凝土作業デ御座イマス。

一、コチラハ材料試驗室デ御座イマス。第二學年ト第三學年生ガ「コンクリート」「セメント」ノ強度ノ試驗ヲ致シテ居リマス。

一、コチラハ色染仕上科デ御座イマス。

此レハ手捺染ノ順序デ御座イマス。此ノ型紙デ順次色糊ヲ置き最後ニ地色ヲ着ケマシテ蒸シテ水洗ヲ致シマス。

コチラハ第五學年生ガ機械捺染ノ配合試驗ヲ致シテ居リマス。

一、コチラハ試驗場ノ漂白工場デ御座イマス。此レハ布ノ織目ヲ平滑ニ致シテ居リマス。

此レハ精練致シマシタ「ボブリン」ヲ水洗致シマシテ漂白槽ノ中ニ運ンデ居リマス。

此レハ縮ノ皺取りデ御座イマス。

一、此レハ試驗場ノ圖案部デ御座イマス。夏向織物ノ圖案ヲ描イテ居リマス。

一、コチラハ染色工場デ御座イマス。アレハ糸染ヲ致シテ居リマス。向フハ染色堅牢度試驗ヲ致シテ居リマス。

一、コチラハ能率部デ御座イマス。此レハ適性検査器デ御座イマス。織工ノ適性試験ニ使用致シマス。

向フデハ「エネルギー」ノ代謝試驗ヲ致シテ居リマス。作業時ノ姿勢ニヨリマシテ「エネルギー」ノ消耗ニ甚シ

イ相違ガ御座イマス。今ハ綜統通ノ時ニ於ケル状態ノ試驗ヲ致シテ居リマス。此ノ方法ハ作業時ニ於ケル呼吸ヲ採取シマシテ分析シテ酸素ノ消費量ヨリ「カロリー」ヲ計算スル方法デ御座イマス。

一、此處ニ陳列致シテアリマスモノハ静岡市以西ノ特許發明品デ御座イマス。榛原郡、小笠郡地方ハ茶ノ生産地デア

リマシテ製茶ニ關スル優良ナ機械ガ發明サレ、又小笠郡、磐田郡地方ハ薬工品ノ生産地デアリマスノデ之レニ關スル建機、自働薬供給装置、製繩機等ガ考案セラレ、壘表ノ生産地デアリマス引佐郡地方ニ於テハ壘表織機ガ發明セラレテ居リマス。

一、此レハ學校ノ色染仕上科デ御座イマス。第三學年第四學年ノ生徒ガ小切レヲ以テ染料ノ染着試驗ヲ致シテ居リマス。

一、コチラハ染料ノ製造試驗デ御座イマス。

第五學年生ガ「メチルバイオレット」ヲ造ツテ居リマス。「ヂメチルアニリン」ニ硫酸銅、石炭酸、食鹽ヲ加ヘ加熱シマス。「メチルバイオレット」ノ銅化合物トナリマス。之レニ石炭酸ヲ加ヘマス。「カービノールベイス」ノ沈澱ヲ得マス。之ヲ濾シ取りマシテ硫酸ヲ加ヘマス。「メチルバイオレット」トナリマス。之ヲ硫酸曹達ノ飽和液デ析出致シマスレバ即チ「メチルバイオレット」ノ泥狀ガ得ラレマス。今後ハ此ノ種ノ實習ニ重キヲ置カネバナラヌト存ジテ居リマス。

一、コチラハ整理工場デ御座イマス。

此レハ別珍ノ「エムボッシング」デ御座イマス。模様ヲ彫刻致シマシタ鋼鐵「ロール」ヲ高熱シ紙「ロール」ト強壓廻轉致シマシテ其ノ間ニ布ヲ通シ模様ヲ壓シ出スノデ御座イマス。

一、此レハ晒「ボブリン」ノ巾出デ御座イマス。

向フハ「セル」ノ湯熨斗デ御座イマス。

此レハ「ボブリン」ノ苛性仕上デ御座イマス。布ヲ濃厚ナ苛性ソーダノ冷液ニ通シマスト約三割收縮致シマスガ縮ムコトノ出來ナイ様ニ鎖ニ挟ミマシテ進行中ニ湯デ洗ヒ酸デ中和致シマス。サウシマスト織目ガ平滑ニ成リ且

光澤が出ルノ御座イマス。

目今我國ノ中小工業ニ對シテハ此ノ種ノ作業ノ援助ヲ致シマスコトハ有益ナコトト存ジテ居リマス。

一、向フニ見エマスノハ建築科ノ標本家屋デ御座イマシテ各種ノ材料ヲ用ヒ各種ノ工作ヲ施シマシテ家屋全體ガ標本トナル様ニ仕組ンデ御座イマス。生徒ノ實習トシテ數年計畫デ建テ、居リマス。

(以上)

御臨幸を仰ぎ奉りて

静岡県立濱松工業學校長
静岡縣濱松工業試驗場長

山 本 又 六

今回

聖上陛下 本縣下御巡幸に際し 龍駕親しく本校竝に工業試験場に御臨幸遊ばされ授業及び作業の状況を詳細に天覽を賜はりました事は長くも又有難い極みで洵に感激措く能はざる所であります。

御臨幸は五月三十一日の午前十時二十五分より同五十五分に至る約三十分間でありまして、此間に於て學校及び試験場の内部を沿く御覽遊ばされたのであります。今日迄に工業學校で御臨幸を仰ぎましたのは、全國に於て僅かに一二の學校のみで工業試験場としては今回を以て嚆矢かと存じます。當方は學校試験場共に設備萬端不充なるにも拘はらず御臨幸を仰ぎました事は洵に恐懼の至りでも畢竟工業御奨励の深き御聖慮の存する所と拜察いたしました感激に堪へない次第であります。

四月中旬頃より何れよりもなく御臨幸の噂が段々と濃厚になつて参りまして、或は左様な光榮な事もあらふものと恐懼の裡に十數日を過しました。此の間の一種の不安と焦慮とは實に譬ふるに物もなき程でありました。と申しますのは愈御臨幸を仰ぐ様ならば十分の準備をしなければなりませんし又準備をして御臨幸のない場合には當て推量で事を運んだ輕卒の譏を受けねばならぬ事となります。そこで御臨幸の無い場合にも無駄とならない様な事の準備を不言の裡に進めました。

五月六日に至りいよ／＼縣より御臨幸御決定の御沙汰を拜しまして大に安心すると同時に非常なる歡喜と一層の緊張を以て着々と準備を進め殊に多數機械の危險防止に就ては人知れぬ苦心を致しました。

天覽に供へ奉るべき作品と作業に就きましては、主務官に御伺ひ致しまして大綱は決りましたが細部に就ては御指圖がありません。そこで如何になしたならば御聖慮に副ひ奉るを得べきかと云ふ事に苦心致しましたが結局有りの儘を天覽に供する事が最も正しいと相考へ學校及び試験場の本質、組織及び方針に立脚して計畫を立てました。

學校に於ては生徒は第二學年以下は校門外にて奉迎送をなし第三學年以上（圖案建築は第二學年以上）は平素の通りに配置して實習、作業を天覽に供し奉り天覽品に就いては生徒平素の成績品と試験場の製作品と合計貳百拾九點を講堂に陳列する事と致しました。

愈御臨幸の日が近づきました。そこで校場長として奏上と御説明をせなければならぬのでありますが此の大役が満足に出来るかどうか殊に時間の制限に就いて非常に心配となつて参りました。幾度も豫行演習を行ひ又私個人としては時間研究と動作研究とを致しまして先以て言葉と動作の點では是ならばと思はれる程度に達しました。然しさて愈々となつた場合に眞に此の無上の光榮に感激し或は餘りに恐れ畏み却て心の平靜を缺いで前後を失し何等かの失態を爲すなき哉と云ふ事に就ては如何にも自信がありません。此の點甚だ不安でありました。其の中に二十七日の海軍記念日となり不圖日本海々戰の時 照憲皇太后様の御夢に現はれたと傳へられる坂本龍馬の事を思ひ出しました。龍馬は私の同郷の先輩で一身を捧げたればこそ維新の際あれ文王事に盡す事が出来た事と思ひ當りました。今次の

聖上陛下 の御臨幸は其の御主旨の中には御視察といふ事も含んで居られる事と拜察せられます。果して然りとせば、私として此御聖旨に副ひ奉るよう身命を捧げて御奉公申上げればそれでよいのであります。これ即ち臣子の本分を完うする所以であつて餘事は考る必要はないと思ひつきました。此時初めて腹がすわり是ならと云ふ覺悟が出来

ました。

さて當日になつては全く心氣の平靜を得場内は靜寂其の物で私は玄關で心靜かに御着叢を御待ち申上げる事が出来たのであります。

愈々御召車が着御になり私は最敬禮後直ちに御座所へ御誘導申上げドアの外に直立いたしました。少時の後木下主務官の御指揮により御座所内に入り最敬禮の後御卓子一步前に進みまして再び最敬禮の後學校、試験場の状況を奏上致しました。（奏上案別掲）

奏上は約三分間に互り豫定の通り申上げる事が出来た様に思ひます。

陛下には言上致しまする事をいとも御熱心に御聴き取り遊ばされた様に拜されましたが中でも學校の教育方針の所に於て「當校の教育方針は道德教育に最も重きを置き、質實にして勤勞を好むの良風を馴致致しまする事に努めて居ります」と申上げました時には

陛下には非常に大きく御首肯遊ばされました。私は餘りの有難さに胸元に何かこみ上げてまゐりまして後の句が一寸出ませんでした。試験場についても輸出織物に重きを置ける事及び能率増進の事業に力を致せる事等に就いて申上げた際には一々御首肯遊ばされました。一介の微臣の言上に對し一々御首肯を賜りました事は非常に有難く感激致しました。奏上を終つて直ちに退出いたしました。

陛下には間もなく出御遊ばされましたので御先導を致しました。先づ廊下にて有資格職員に列立拜調を賜はり續いて校場内を御巡覽遊ばされました。御順序は圖案實習試験場學校成績品、機織工場、建築製圖、鐵筋混凝土作業、木工作業、建築材料強度試験、捺染實習、漂白工場、圖案室、浸染及試染室、能率實驗、本縣西部發明品、浸染實習、織物整理の順序でありまして、其の内容は頗る多岐多様で今其の御有様を一々記述申す事は不可能であります。此

所には特に有難く感激致しました事を一、二、申述べたいと存じます。陳列場にて綿ポプリンの生地より完成品に至るまでの工程順序を標本に就いて私より此れは高級輸出綿布中の重要な一品種でありまして英國品など、競争して着々成功しつつあるものであります旨を申上げました處

陛下には實に非常の御満足の御様子に拜されました。其の他に於ても國産品が成功せる事を申上げました場合には如何にも御満足氣に拜されました。

又大正三、四年以來の遠州織物の意匠圖案の變遷を表装致しましたものを御目にかけ、大體の御説明を申上げ尙意匠圖案の變遷は時代人心の反映でありまして之を通じて人心の歸趨と技術の進歩とを窺ふのは興味のある事と存する旨を申上げました處繰り返し、何回も御覽遊されまして、餘程御興味を惹かれた様に拜されまして、恐懼致しました。又生徒の成績品中圖案及建築の製圖は三箇年間に（舊制）入學當時の稚拙なるものより一人前の腕前と成る實技教育の進捗と完成の實際には餘程御興味を惹かれた様で暫時御佇立御熟覽遊ばされました。

織工場では自動織機に就て瑞西のルチースタイネン式、亞米利加製のノースロップ式、濱松の阪本式、名古屋の豊田式に就いて可なり詳しく御説明申上げ最後に我國製品は工作成績共に外國品に劣らず、且價額の點に於ては優に安價なる事を言上致しました。此の時にも

陛下には非常に御満足の御様子に拜されました。

圖案科の實習、建築科の製圖、試験場の夏物の着尺圖案等の所にては何れも机の直前までつか／＼と御進み遊ばされ彩色運筆の實狀を御覽遊ばされ殊に試験場の圖案に於ては大衆向とも申すべき本年夏物着尺の實際を一通り御目通し遊ばされた事は、誠に恐懼の他ありません。

最後に御説明三十分間を通じて最も感激致しました事は

陛下には多數の製品作業等に一々非常なる御熱心を以て御注視遊ばされ十分に御得心遊ばされない中は他に御目を御轉じ遊ばさないといふやうな御態度で、些事をも苟も遊ばされぬ御研究心には全く感激の他ありません。

又甚だ懼多い申し様であります但段々と御説明を申上げて居る中に何時の間にか御仁慈の御態度に御親しみを感じ御國父とも申上ぐべき一種の感情に浸つて参りまして、すら／＼と御説明が出来た様になりました。惟ひまするのに此の心持は其の淵源する所極めて遠く、深きものあり、「世界の」どこの人も味ひ得ない我等日本人のみ獨り有する誠に尊い或ものゝあつて然らしむるものと存じ、只々有難く感ずる次第であります。

尙奏上の際には自動車の入換、其の他に外部が相當騒々敷く

陛下に對し奉り誠に懼多く、又私の奏上に就きましてもさぞ困難であらふと他の職員達が心配して呉れたと後にて聞いた事ではありますが、此の時は私の耳には一切何物も聞えず天地間只

陛下あるのみ。御侍立の方もなければ自己の存在も、意識しない位でした。是が即ち所謂無我の境地とも云ふべきものでせう。誠に偉大なる體驗でありました。

今回の御巡幸に當りまして、學校並に試験場が此の空前の光榮に浴し、言語に絶する幾多の感激を親しく致しましたに就きまして、私共は益々奮發し現時、尙幾多の缺點を有する我が國工業教育の改善振興と、斯業の革進合理化に滿身の努力を捧げ、以て今回の光榮に應へ奉らねばならぬと存じます。

御臨幸所感

教諭 平 石 榮 一

秀峰富士の白雪未だ溶けやらす三保の邊り翠松に霞懸りて岳麓を五彩に飾る五月の候、畏くも 天皇陛下本縣へ行幸仰出させ給ひて親しく縣下の産業並に教育の状態を嚮はせ給ふ。岳南三州百七十萬の縣民あげて御仁慈のほど懼くも忝けなく奉迎しまつりたるは實に一世末代までの光榮なりき。別して初夏五月三十一日西遠地方御巡幸に際しては親しく本校場へ御臨幸遊ばせ給ひ詳さに校場内の實況を嚮はせ給はるに至りては吾人が嘗て夢にだに想ひ設けず、ま如何にも現實とは思考せられざる破格の光榮にて只管恐懼致しことなりき。されば全校全場あげて感激の絶頂に達し、克く赤誠をいたし、あらゆる最高の努力を拂ひ、緊張裡に遺漏なきを期してその日を待ちたり。三十一日。空は翠に晴れ渡り若葉の梢に囁やく初夏の朝風も、今日の御幸を歡ぶ様なりき。十時頃各々其部署に着き肅然として御待申上ぐ。やがて光輝燦爛たる御鳳輦を眼前に拜しその尊嚴さに暫しは無我の状態なりき。殊に當日は微賤の吾々の總てが天顏に咫尺して奉迎し、或は實習を天覽に供し奉るなど、古往今來嘗てなき何たる光榮ぞや。

嗚呼何たる寵光ぞ。家門の名譽ぞ。國民の至福ぞ。斯くも畏く有難くよき日を迎へ奉りて。惟へば至幸なり我等五百の校場友。將た奇縁なり茲に師たり弟たりして共に／＼無上榮光に浴するとは。嗚呼。彼の數句に互たる念願と淨化とは誰れかは永久に忘るべき。嗚呼校場をあげての至誠は即ち祖先傳來の赤き血潮の漲りにて大君を思ひ、皇國を愛護するの精神にして、又熱烈なる愛校心の表現なりき。今や吾人の責務は一層の重大性を増し、各々序に順ひ其修養にまた勉學に精進し、大いに向上を期すると同時に相互の親和をいたし協力以て國家の安泰を圖り御聖恩に報ひ奉らざるべからず。

わが工業試験場の光榮

技師 麻 生 治 一

豫てより仰せ出されました 聖上陛下御臨幸の御事がいよ／＼今日となりました。數多い工業試験場の中に懼れ多くも初めて本場へ御足跡を印せられましたのは洵に光榮の至りで御座います。

此の日幸にも天皇日和ともいふべき好天氣でしたので晴れの行幸を無事に果す様にと神かけて祈願致しました。

私は染色部漂白工場より扈從の方々の中に加はりました。陛下には前日よりの御疲勞の御氣色もおはしませすいとも龍顏麗はしく御熱心に御巡覽遊ばされ、殊に今回の御巡幸の御聖旨の一たる産業の御視察について微細に嚮はせられましたのは唯々感激の極みでありました。初めは懼れ多さに何事も拜することは出来ませんでした。が場長の朗かな御説明の聲に漸く我れに歸りました。圖案室に於ては作業機の側近くに玉體を運ばせられ製作法を熟々と御覽遊ばされ又壁間に陳列した夏物流行圖案に御目を止めさせられ、場長の御説明を聽召されまして繰返し何回も御覽遊ばされ余程御興味を惹かせられた様に拜せられて恐懼致しました。續いて浸染及び試験室・能率實驗・本縣西部發明品・浸染實習・織物整理の順で御巡覽遊ばされましたが場長の御説明に一々深く御首肯遊ばされ輸出織物に重きを置くこと、又我が國産の機械が今や外國製を壓倒し却つて工作成績共に外國品に優れ且つ價額の點に於て遙かに安價なることを聽召され非常に御満足の御様子に拜せられて兼ね／＼産業に大御心を注がせられることを思ひ合せて懼れ多いことで御座いました。又場長が能率増進の事業に力を致せること等を言上申上げましたに付いても其の御説明以外のこと

までも御察しあらせられて一々御首肯給はつた様に恐察致しまして非常に感激にうたれました。続いて染色實習織物整理等様々の製作を一々御熱心に御注視遊ばされ御研究的に御得心遊ばさるゝまで御目を止めさせられました御態度は永く忘れることは出来ないであります。

茲に試験場が此の空前の光榮に浴し、又、何等の御支障もあらせられずいと御満足の御様子で御還幸遊ばされたことを深く御歡び申上げると共に今後益々業務に精勵して斯業の向上發展に努力し御聖旨の萬一に副ひ奉りたいと存する次第であります。

御親閲と訓育

配屬將校 伏見大尉

昭和三年春縣下中等學校長、訓育主任、配屬將校一堂に會し、訓育會議を開催せられたる事ありき。當時我等は御親閲を仰ぎ度き熱望ある旨開陳する所ありしが、今回遂に其の光榮を享くるに至りしは、實に歡喜措く能はざる所なり。

二萬の男女子相集りて、或は歩武堂々分列を行ひ、或は律呂整々頌歌を奉唱す。其の頭右の禮を行ひ天子に注目するるとき、其の萬歳を三唱して天地亦和するのときに至つては、只々虚心にして坦懐、清明にして忠誠、實に一ありて二なし。此の氣此の心、是即ち我等が三千年來繼承せる唯一のものに非ずして何ぞや。

由來訓育の事甚だ難しと謂ふも、此の氣此の心を以て、相頼り相扶けなば、豈に夫れ難からんや。又何をか言はん。

五月三十一日。天皇臨幸濱松工業學校。恭賦記喜。

教授囑託 矢田徳太郎

宿雨新晴處。校門翻旭旌。至尊枉駕日。庭樹頓添榮。
何幸迎鳳輦。親臨机席間。微臣垂感淚。咫尺拜天顏。
臨幸半時刻。鞠躬導聖君。準繩天則在。豫定不遑分。
聖主回龍駕。餘香玉座香。清風吹文幌。杜若映金屏。
聰明萬乘主。盛德真堪欽。宸慮存風教。恩榮感慨深。

五月三十日。天皇巡幸濱松地方。駐輦三日。賦此記感。

此日迎龍駕。欣然我意降。雨霖初快霽。新綠映書窓。
鳳輦輕儀衛。市民拜玉容。薰風吹萬戶。歌頌響濱松。
觀風仁政遠。億兆樂宸遊。節物留龍眼。採桑與麥收。
灑掃敷玉沙。奉送人如堵。輦道徐行處。晴光照鹵簿。
康衢銀燭耀。大廈幾層階。千載傳恩澤。更名御幸街。

聖駕を奉迎して神國思想の發揚を宣す

教 諭 鈴木喜之輔

皇紀二千五百九十年五月卅一日吾校 聖天子の風輦を奉迎し赤子の丹心感泣無我の境地に彷徨す、吾人我に歸りて古典を閲し國家趨向の沿革を鑑みて一文を草す、讀者幸に其の想を共にし其の行を同じうせられんには當に吾人の喜悅に止るのみならず是正に皇國の前途に愈々光輝の添ふることあるを痛感せずんばあらざる也。

吉野朝廷の忠臣北畠親房卿の名著神皇正統記開卷劈頭に曰く「大日本は神國なり、天祖始めて基を開き日神長く統を傳へ給ふ我國のみ此の事あり、異朝には其の類無し、此の故に神國といふなり」と。

是明かに皇國は神國てふ思想に萌發せられて論述せられし一大名文也。當時の日本宗教を達觀するに佛教は形式上准國教的の位置にありて宗教的行事は佛教の儀式に従ひ宗教的觀念は佛教の用語にて表現せられしも其の根柢に横溢せる信仰の核心は之を神道に求めざるべからざることを察する也。

日本を神國となす思想は古事記日本書紀中の神話に基因なすは勿論なれども其の因て來る所の思想系統は其の淵源更に深遠なることを考ふるものなり。古事記序文に曰く、

臣安萬侶言、夫混元既凝、氣象未_レ效、無_レ名無_レ爲、誰知_レ其形、然乾坤初分、參神作_レ造化之首、陰陽斯開、二靈爲_レ群品之祖、云々と、

國學者本居宜長翁の古事記傳に之を註して曰く「序にこれらの「陰陽乾坤などの説」語あるはかへりて古傳にさる意なき證とすべき物にて正實と虚飾とのけぢめいよよ著明し、これを以ても大御國の心ばへの漢籍のおもむきとははるかに異なるほどをもささるべくはた本文にはいささかも撰者の私をまじへざるほども知られていとたふとしかし」と誠に識見の偉大なるをむしろ驚嘆に堪えざる也

實に日本は神國也。こは我等の祖先の遠く把持して傳へ來りし一定不變の一大信仰也。而して最も正しく最も美しき日本精神の眞髓は畢竟この神國思想の發揚に存することを推知せざるべからざる也。

抑も神國思想は祖神崇敬の信仰に其の源泉を探らざるべからず、祖神崇敬を更に分析すれば祖先崇拜と神祇崇拜とよりなる、元來吾人の生命は肉體と靈魂とより成り肉體は之を祖先に享けたるが故に祖先を崇拜するは當然のことなり。靈魂は神と連鎖するが故に自己の生命の源泉として神祇を崇拜するも亦當然の思想なりとす、然れども是等の現象は外國にも見る所なれど之が合體して一に歸し祖先は皆神祇として祭祀せらるゝに至り日本獨特の思想の發生を見るに至りしこと其の例なし。上は即ち皇室より下は國民に至るまで皆神の子孫とし吾人も亦神の性格を享受せりと自覺しこの皇室を中心としてこの國民相集りて大日本帝國てふ一大國家の成立をなすが故に「日本は神國也」と論斷して明快なることを覺ゆる也。

中世の末葉に至りてキリスト教が我が國に渡來し民衆擧つてそれに風靡され諸種の弊害を醸成せんとせし時豊臣秀吉は天正十五年六月十九日長崎のカトリック教徒を放逐し二十日以内に日本を退去すべき命令を發せり、曰く「日本は神國たる處切支丹より邪法を授候儀太以不_レ可_レ然事」又曰く「日域の佛法を相破事曲事候」と、又曰く、佛法のさまたげ不_レ成輩は商人の儀は不_レ及_レ申いづれにもキリシタン國より往還くるしからず候」とあり。右秀吉の禁令中佛教の壓迫を怒りしが如き利己的動機あるもこの筆者は蓋し佛教僧侶の文章たるべし、然れども「日本は佛教國なり」

と記述せざりし處以て民族的信仰の那邊に存せしかを察するに難からざるべし。

此の觀念は國初以來吾人日本人の頭腦を占領し持續し傳統して所謂「日本國は神國也」といふ思想系統は何處の場所何處の時に於ても恒に變はらざる吾國民の根本思想たらずんばあらざりしなり。

下りて徳川家康の切支丹伴天連の追放文中に曰く、「夫れ日本は元是神國なり」としたり、山崎闇齋は自ら儒佛二道に通じながらも「自分は日本人である」と強き信念を有し遂に神道を修めて神代ながらの連綿たる日本精神を明らかにして垂加神道の一派を形成せしにあらざや。斯く吾人の先輩に依りて繼承せられたる傳統的「神國思想」即「日本精神」は爾來幾多の國學者に依りて宣言せられ遂に尊王運動の烽火となりて彼の明治維新の大業を達せしめぬ。

今や世は思想混亂の中に有り、これ詮ずる所歐米文明即ち自然科学尊重の觀念極端に走りて却りて「汝自身の姿」を分明するに苦しむものなりといはんか。往古ギリシヤのデルフォイ神殿の扉には「汝自身を知れ」との文字刻しありたりとかや。ギリシヤ文明の末流を汲んで近代歐米の自然科学思想生れ、これに禍されて「汝自身の姿」を忘却するものある我國時代の世相轉た寒心に堪えざるものなしとせず。

吾人常に思を此處に置くものあり、感極まりて筆を運ぶ、故に妥當の見解と論評を失するものあらんことを恐る。然れども神國思想發揚せずんばこの皇國を萬代の安きに榮えしめこの國民を無窮に安泰たらしむること蓋し難きに近からんことを恐るるもの也。

行幸所感

色染仕上科
工手 鈴木邦夫

昭和五年五月卅一日、何と光榮の日だつたでせう。一生忘れる事なく記念する日です。我等は只感激の他何物もありませんでした。

私は試染工場に居りましたが工場に御成遊ばされる數分前私の鼓動ははげしく高鳴りました。御入場の前最敬禮を致しましたら畏くも學手の御答禮を遊ばされました。

陛下には御興味を以つて御覽に遊ばされた様に拜察されました。校長先生の御説明に對し強くおうなづきになりました。

第一製圖室にて

建築科
助手 森下喜久男

陛下には校長の御先導により製圖室にお成り遊ばされ親しく作業を御覽遊ばされました。一同最敬禮を以て御迎へ

奉り校長の御説明の間に畏くも御英姿を拜する事が出来得ました。ほんの寸時。

陛下を拜するや筆舌に表はす事の出来ない或る大きな力に打たれ無意識の中に頭の下つてゐたのを後に感じました。これ程の光榮吾等の生涯に又と有得るだらうか。自分は此の幸運の世に生を得た事を神に深く感謝せねばならぬと思ひました。

聖上陛下行幸の感想

色染仕上科
第五學年 藤 森 繁 夫

五月三十一日恐らく此の日は我々一生を通じて、片時も忘れ得ぬ思ひ出の日となる事であらう。濱松十萬の市民が有らん限りの赤誠を披瀝して奉迎の意を捧げんと月餘に亘つて種々の準備を整へお待申し上げました。

天皇陛下濱松御巡幸の日は終ひに來た。此の日天高く澄み一點の雲も認めぬ日本晴でありました。濱松市民同胞は勿論和やかな晩春の風にゆらぐ木々の青葉も嬉々として

聖上陛下の御巡幸を御祝するかの如くでありました。

殊に工業學校並びに試験場へは當日午前十時廿五分を以て御臨幸を忝ふし生徒の實習、試験場の有様及び學校試験場の製作品の天覽を賜ひ三十分間で還御遊ばされました。當日私は捺染の實習を専ら心を込めて御覽に入れました。けれども共あまりにも近くはつきりと、御姿を拜する事が出来只々有難さと勿體なさとで胸が漲り、感激の涙に咽ぶのみでありました。

又午後は大井川以西の學生、在郷軍人、青年團等が、濱松高射砲聯隊練兵場に集まり威風堂々と分列式を行ひ、大いに駿遠健兒の意氣旺盛なる所を御覽に入れ

陛下にはいとも御機嫌麗はしく警官隊の嚴重なる警衛の中を、夕陽を浴びさせつゝ靜々と飛行聯隊へと向はせられ、翌六月一日には午前の中に濱名湖、井伊谷方面を御巡幸遊ばされ、午後一時頃、學生、在郷軍人、青年團、各種公共團體の奉送裡に沼津へと向はせられました。

あゝ思ひ出せば此の濱松市は明治大帝が明治の初年御東上の途次御駐泊を賜りたる以來初めての御風駕を迎へ奉るので市民は此の上も無き光榮として感激の涙と共に御名残を惜しみました。實に此の千載一遇の光榮に浴した我々は何れも御聖徳を仰ぎ聖恩の有難さを感じずには居られませんでした。我等は將來大いに奮闘し、而して聖慮を安んじ奉り聖旨の萬一にも副ひ奉らんとすることこそ、實に我等の重大なる務めといふべきであります。

五月三十一日の私達の感想

色染仕上科
第五學年 山 本 勝

五月三十一日を私達は何うして忘れる事が出来得やうか、すべては感激に満たされた御臨幸の日なのだ、先驅御着の合圖のベルが鳴つた、不動の姿勢をとつてお迎へした。

少しづつ私達の上に沈黙の間に時が流れて行く、その時の流れるにつれて、ひし／＼と何物かが私達の胸を衝いて來た。其れと共に眼瞼に涙が潤んで來た。止めようとしてもそれは不可能だつた。

二、三分過ぎて、着御と同時に最敬禮をすますと直ぐ仕事に就いた。其の間誰一人沈黙を破らうとする者が無かつた。其れは云ひ表す事の出来ない感激の涙が私達の胸をしめつけてゐたからである。

村上先生がお迎へして

聖上陛下が工場に入御になると同時に主任の先生の「氣を付け！」の號令で私達は仕事から離れて不動の姿勢、それから「禮!!」私達は最敬禮、そして徐ろに頭を上げた私達の眼前に

天顔が拜せられた。そがほんの二、三秒間だつた。又仕事に就いた。

だが其時の私達のあの感激、感謝の思ひは決して筆や口で言ひ表し得ない、森嚴其の物だつた。

畏くて涙！ 涙と繰り返す許りだ。

あゝ五月三十一日よ——私達は何と申してよいか解からない。總べては感激、感謝、喜悅そればかりだ。

天皇陛下萬歳!! 〳〵!! おゝ此の叫びよ、それは私達日本人のみ持つ性のそして血の、魂の、叫びでなくて何んであらう。天空はあんなに高く〳〵限なく晴れて、陽は私達に溢ふれる迄に浴びせ掛けてゐるではないか。

あゝ五月三十一日。

聖上陛下の御臨幸と我等の覺悟

紡織科
第五學年
鈴木 正 男

春陽の馥郁たる花は何時しか其の姿をひそめ草木皆新緑を競ふ時!

昭和五年五月卅一日!! 白日照り輝くこの佳き日こそ我等の愛する學舎として永久に記念すべき光榮の日であります。此の日長くも天津日繼の

聖天子親しく我が草深き學舎に玉歩をはこばせ給ひ長時に亘りて我等の勉學狀態實習狀況を御熱心に贊はせ給ひました。

此の空前にして絶後なる光榮!!

鴻大無邊なる聖恩!!

我等神の赤子として、此の無上の榮譽に對し奉り感激勇躍せず居られませうか。そして皇國を愛する熱情に燃えずに居られやうか。そして又愛校心が力強く湧き出でずをられませうか。

我等は心から

天皇陛下萬歳を叫び、我が校萬歳を叫ばずには居られません。我が學舎に勤むる若人よ自覺せよ。縣下中等學校の數ある中から撰らばれて特に御臨幸を仰ひだ我等の學舎を、そして又此の絶大の榮譽を。

我等は自己の修養勉學に今一層努め勵み、此の光榮に沿ふ様にしなければならぬ。かくする事が引いては

聖天子の大御心を御慰め申す事となり又聖恩に報ゆる所以ともなるのです。

行幸の記

圖案科 小宮山由郎
第三學年

顧みれば去る五月二十八日畏くも

聖上陛下には本縣下に行幸遊ばされ特に吾等が學校としては創立日淺きに拘らず親しく龍駕を迎へ奉つて我等の製作品及授業の天覽を仰いだ事はたゞ々々感激恐懼するばかりです。

行幸御發表以後は職員並びに在郷軍人も加はつて警備をするものもあり、或ひは毎日放課後の時間を利用して皆五社神社に参拜し心身共に清く正しく打淨めて神の御加護に依つて陛下の御安體を祈り奉り、此打揃つての絶大の聖恩に報ひ奉らんと心掛けました。學校に於ては職員始め全校生徒打揃つて大掃除を行ひ校舎内外を磨き上げました常に掃除のきらひな我等としても此の時ばかりは心が進み日に々美しく淨められて行きました。

掃除を行ひながらも常に頭の中に

聖上陛下の御英姿が走馬燈の様に思ひ浮べられました。學校に御臨幸遊ばされた時は何んのお疲れの御様子もなく龍顔いと麗しく校長先生の御説明を御聞になられ御巡覽遊ばされました。御衣服も御質素であらせられ畏れ多くも我等の御手本とし奉る所と拜されました。

翌六月一日高射砲聯隊前で 聖上陛下を送り奉つた瞬間、一種感滅の涙をせき止める事が出来ませんでした。

此の後は益々奮勵努力して勅語にもある如く一旦緩急あれば義勇公に奉じ以て天壤無窮の皇運を扶翼し奉らねばならぬと思ひました。

龍駕を迎へ奉りて

紡織科 石橋武雄
第四學年

聖上陛下本縣御巡幸のおもむきが發表され、本校もその御臨幸の候補にあげられてゐると聞いて、どんなにうれしく光榮に思つたこととせう。

下檢分がすんで愈々本校に御臨幸と決定致されました時には、我等益々その責任の重大なるを感じ、必ず聖旨に副ひ奉るやうにと努力して参りました。

時、まさに初夏。萬物の生氣澄潤たる時、わが校庭の樹も草も一層青々として光榮に輝きました。

いよいよ五月三十一日午前十時二十分頃、御車は本校の玄關に着御になりました。

聖上陛下には御少憩の後、講堂の陳列品を天覽あらせられ、ついで我等の力織機實習室へ御巡覽あそばされたのであります。我等は機械の運轉を止め、最敬禮をすました時、丁度

陛下には玉歩を室内に御印しあそばされたところでした。その時にはばつと室内が光り輝いたやうに感じ、異常な感激に自分を忘れてしまつたのであります。陛下が自動織機の説明を聴取あそばされてゐる間、我々は機械の運轉を止めて居たのであります。その時間が以外に長かつたので陛下が如何に織物工業といふことに御留意あらせられ

てゐるかといふことが拜察せられるのであります。

實習室を御出あそばされて順次校内をおまはりになりましたが、其間 陛下には終始御熱心に研究的御態度を持たれまして御覽になり、すべてのものに大變興味を御感じあらせられたと聞きまして一種の感にうたれたのであります。恐れ多くも我等草莽の民をもつて、龍顏に咫尺して、空前絶後の光榮に浴し、昭和聖代に生を享けた者として一種の感激をつくつくと感じたのであります。

我等は今後益々努力して自己の天職にはげみ、此の光榮の萬分の一にも報いねばならぬと深く自覺したのであります。

御臨幸に感激して

圖案科 久保田宗平
第二學年

我々濱工の生徒は何といふ光榮に浴したことでせう。皇國に生を享けた御恩を報ゆるは此の機會と吾々生徒は毎日く 聖上の御臨幸を指折り數へながら溢るゝ感激と緊張の中に初夏新緑の暑さに打勝ち作業に製作に一生懸命に力を盡くした。五年級の生徒は夜警を夜の十時頃迄してくれ三年生は毎日く五社神社にお詣りして 聖天子の御臨幸をひたすら御待ち申しました。やがて五月卅一日は來た。時は來た。吾々の目の前に御出になる時刻は刻々に三十分二十分とせまる。皆は感激に打たれてか黙々として實習の準備をした。湧來る感激の情に高なる鼓動を抑さへて靜坐をする。しばらくしてベルがなる。一齊に起立する。第二のベルで最敬禮をする。もう着御になつたかと思ふと全身の筋

肉はビリリと引締り鼓動はいよいよ高くなる。やゝあつて廊下の靜けさを破つて、こつり、こつりと音がする度に、ぎゅ、ぎゅと胸と云はず、身といはず引締られて、神々の御前に出でた時の様に眼中一物もない。やがて先生の底力の有る最敬禮。嚴かで唯神々しさに熱涙をこぼして頭を上る事すら出来なかつた。やゝあつて、還御のベルが鳴つた。一同は起立して、最敬禮をした後ぼうつとして一時は何もかもすつかり分らなかつた。其の三十分と云ふものゝ内は唯一人として微動だにしなかつた。やはりこう云ふ一大事の時には濱工精神と云ふものが如何に偉大であるかといふ事を吾々は深くく直感せずにはゐられなかつた。

御臨幸に感激深し

建築科 澤光 二
第二學年

畏くも 聖上陛下が産業御獎勵民情御視察の爲に我が靜岡縣に行幸し給ふと云ふ噂が立つて暫くしてから其の御臨幸候補として我が學校、試験場も入れられる事となりました。

それから我が校は大活動を始めました。下検分があつてから數日後確實に我が校へ御臨幸し給ふと云ふ事が分かりました。急に校内は大勢の夫人の爲に騒々しくなりました。僕は天覽に供すべき作品の製作に掛りました。「之を陛下が御覽になるのだ」と思ふと何だか夢の様な氣もしました。そしてあの位一心に書いた事はありませんでした。行幸の日は段々近づいて來ました。御親閱の豫行演習や作業の爲に夜はグツタリと疲れてしまふが僕等は不平等言ふ氣は毛頭起りませんでした。未だく足りないと思ひました。あゝ!! 此の一大事に臨んで僕等の心は知らずく

の内に緊張して居るのでした。

其の日も後数日といふ或朝控所へ入ると大きなそして勢ある字で「光榮の日は近づけり、吾等の義務をつくさん」と掲げられてありました。僕等は口先では「フ、ン」と云つたものゝ實際は身の寒くなるのを感じました。それから校長先生の話があり其の中に「昨夜白装束をした人々が大勢校門の前で何か一心に拜んでゐた」と。あゝ其の時僕等は全く眞剣になつてしまひました。畏れ多い事だ、余りに畏れ多い事だ。と云ふ考へが強く僕等の胸を打つたのでした。

準備はすつかり整ひました。そして遂に光榮の日は参りました。

平素より早く起き、陛下の御安泰ならん事を祈りに氏神様へ出掛けて行きました。大樹鬱蒼たる境内で神さびた社の前に頼びいた時何とも云へぬ莊嚴な気分になりました。昨日練習した通りにして校内へ入つて、それ／＼持場／＼に着きました。僕等はコンクリート練りでした。何時も茶目な皆も緊張し切つて用意をさ／＼怠りなしです。

愈々陛下御着のベルが鳴り渡りました。一心不亂に仕事を續けてゐると「氣をつけ!!」と、先生の號令が掛つた。頭から冷水をかけられた様にぞつとしました。「禮!!」の號令で最敬禮。徐ろに頭を上げる——瞬間。僕は夢中になつて猛烈な勢で仕事を續けました。僕は充分に龍顏を拜する事が出来たのです。あゝ!!數間の先で何と恐れ多い事があらうか。僕は唯々感激に泣くばかりでした。

御親閱に参加するので、還御の後直に晝食をすまし支度をして、練兵場指して繰出しました。はやあの廣い練兵場も参加隊や拜觀者の群で一杯でした。

嚴かな君が代の吹奏の内に陛下は御着になられました。大隊長の號令が満場に響き渡ると、勇ましい軍樂隊の音と共に先頭の隊が運動を起し始めました。我等の隊もそれに續きました。あゝ戦場に於ける我等の祖先が皇國のため

に死を決して、突撃した時のあの熱血が今我等の四肢に忽然として湧き立つたのでした。そして目出度く式が終り陛下は還御遊ばされました。参加隊や拜觀者の群も感激の中に散つて行き美しい夕陽が三方、原の原頭を照してゐました。あゝ聖恩の鴻大なるかな。あの維新の時の熱烈なる國士の如く吾人の若き胸には國の爲、君の爲にといふ氣の満ち／＼て來るのを覺えました。やるぞ／＼死んでもやるのだ。吾等の若き皇帝の爲に。若き日本の爲に。

御臨幸に關する感想

色染仕上科 第三學年 高 林 健 治

綠色の滴る様な若葉が初夏の日に照り輝いて時々風に吹かれてさわめいて居るのが硝子戸越しに眺められます。

「あゝ遂に御臨幸の當日となつたのだ」と思ふと誰の顔にも喜びの色が漂ふて居る様に見えます。今日に限つて何となく室内に活氣が満ちて、何となしに平常とは變つた明るさが漲つてゐます。中庭の芝生やクローバの上に散らした水が葉末に溜つて初夏の朝日に照らされて、或は銀色に或は五色の色にきら／＼と光つて我等の光榮を祝ふが如く、又彼等も我等と同じく光榮に浴せんとして居る様に見えます。

「あゝ僕等は實に光榮の御代に生れた。あゝ建國三千年萬世一系の至尊、今や程なく數間の御前に於て其の尊き御姿を拜せんとしてゐる。陛下には産業御獎勵の御爲に、本縣に行幸遊ばされたのである。然して幸にも工業に従事する我々の仕事を御覽あらせらる、何んと有難い事だらう。自分は自己の職業を完全に全うさせ、又國家の工業を盛んにする爲に社會の一人として大いに奮勵努力しなければならぬ。そうして必ず此の鴻大な聖恩に報ひ奉つらう。」とし

て今此の一瞬間に不注意であつた過去の我から甦つてもつと偉大な新らしい我になれと心の何處からか叫ぶ力強い聲がします。

苟も此の神國に生を享けた青年は大日本帝國をして世界各國の指揮者たらしめ、良く自己の天職を理解して國家の産業を興し、社會のため、世人のために帝國の威勢を海外に發展させ、陛下の御心を安んじ奉り又聖壽無窮ならん事を祈らねばなりません。

御臨幸に關する所感

紡織科 山本 一 惠
第二學年

五月卅一日午前十時、我等二百余名の濱工生は、校門の前に列を整へ御着轡を、今かくと御待ち申し上げて居りました。

十時二十五分は來た。龍禪寺校の前を、鹵簿は靜かに恰も滑るが如く神々しく我校に向つて進んで参りました。

やがて我等の前を御通りになり、畏くも陛下には、我等に御答禮遊ばされました。あゝ何んと云ふ有難く恐れ多い事でありませう。自ら頭は下りました。

陛下は御車より御下りになつて上級生の實習の有様を御覽遊ばされました。

間も無く我等の學校より還御遊ばされました。時に十時五十五分。嗚呼!! 何と我等昭和の御代に生を享けた者の有難さよ。何んと濱工生徒たるが故の榮光の輝やかしさよ。唯々感激。感泣。

聖駕を迎へ奉りて

紡織科 篠崎 一 男
第一學年

聖駕を迎へ奉る校庭の青葉は太陽に照されて、眩しい程に光つてゐました。僕等一同は正門の前に立列びました。はや聖駕の御着になるのも後五分となりました。先驅のオートバイは、けたましい音を立て、走つて参りました。聖駕が麥畠のあたりにお見えになりました。先生の號令で最敬禮をしました。聖駕も日光に照されて眩しく光つて居りました。砂利が御車の下でサク／＼と心持のよい音を立て、参りました。聖駕は今僕等の前をお通りになる所でした。僕は其の時勿體なさ目にくらんで涙のこぼれる程有難く思ひました。ふと北に目をくれば、丁度今玄關先に御着になつて居るところでした。

僕は 天皇陛下の御顔を拜し得たと云ふ事を全く夢の様に思ひました。

御臨幸を仰いで

建築科 北野 禮 三
第一學年

去る五月五日は 聖上陛下が本校へ御臨幸遊ばされるといふ事が公表された日です。校長先生を始め全生徒が神に祈

願して御待ち申し上げる光榮の日が定まつたのであります。

未曾有の事に、先生は固より、全生徒が奮起し、其の日より僕等は毎日の様に準備作業を行ひました。全生徒が分擔して、校内は隅から隅迄雜草を取り除け、新に土を入れた所はローラを曳き、砂利の足らない所は入れ足し、硝子の壞れた所は其れを直したりして、協同一致最善の努力を盡して光榮の日を待つて居ました。

「光榮の日は近づけり、我等の義務を盡さん。」此の張紙に僕等は共に感激し、一層奮發しました。亦神社に參拜して、陛下の御安泰を御祈り申し上げます。

連日の好天氣に恵まれた濱松。

五月卅一日も、空はあくまで澄み渡り正門の大國旗はそよ風にゆれて、聖駕をお待ちしてゐる様でした。待ちに待つた日は來ました。我等の努力の甲斐あつて、校庭は美しく掃き清められ何となくすが／＼しく樹木は青々と茂つて居りました。「こんな事はもう再び無い。天顏をよく拜して置かう」等と考へながら時の來るのを待つてゐました。

午前十時廿五分憲兵のサイドカーを先驅にして、聖駕は悠々と本校に御着になりました。僕等は門前にてお迎へし、神々しい聖顏を拜する事が出來ました。仰ぎ見れば、陛下は我々に擧手の御答禮を遊ばされました。ア、何んと有難い事だらう。我々平民にもお懇ろなお答禮を賜はられるとは!! 僕は只感極つて、嬉しい様な、勿體ない様な氣がして陛下の御爲には一身を捧げて盡しますと神に誓ひました。光榮なるかな濱松の一隅にある此の工業學校にわざ／＼御臨幸あらせられるとは。此の感恩ある、陛下に御奉公するには一生懸命に學業に勵み、立派な日本人として、國のお役に立つ様な人間にならねばならぬと固く決心しました。

やがて三十分の後、御視察終はらせられ恙く御還幸遊しました。やがて僕等は校庭に集り天地に轟く「天皇陛下萬歲」を心から三唱致しました。

母校の爲めに生く

卒業生 齋藤操

初夏の太陽の輝く五月半、聖上陛下静岡縣御巡幸の新聞を手にした私は思ひがけなくも濱松工業學校の六字を發見し新聞を抱いて小躍りして喜んだ。

「そんなにうれしいのか、子供の様に……」

S氏は如何にも軽々しく云つた。

「何ッ!」

私はS氏の前で長演舌を始めた。

「畏れ多くも、聖上陛下におかせられては民狀御視察産業御奨励の有難い大御心から龍駕を我が富岳の下に停め給ふ事一週間、此の間産業、風俗、教育等御視察に相成り給ふ誠に喜びに耐へない處です。況して我が母校に御臨駐遊ばさるゝにおいてをやです。

抑も／＼我が母校たるや、開校未だ日淺しと雖も校風の美しき、設備の全き、全國に其の比を見ず。……」

それから後の仕事は全く手につかず、夢遊病者の様に數日を過した。

其の間走馬燈の様に腦裡を往來する數個の影は、即ち

母校!

靜坐！
名譽！

郷里へ歸りたい！

我！ 等々……。

堅い決心を以て私が工場を一時休んだのは二日後の五月十八日であつた。直ちに家に歸つて龍駕を奉迎するの光榮に浴した。何と云ふ幸であらう——。思へば其の頃の私の念頭に充ちたものは……。

「僕には濱工が附いてゐる」

「龍駕を迎へた濱工が附いてゐる」

唯それ丈であつた。私は今再び足利の地に歸つて榮えある母校の爲に生きてゐる事を強く／＼感じてゐる。

龍駕を迎へ奉りて

卒業生 仲 山 伍 平

嗚呼昭和五年五月下旬

畏し 聖上陛下には辱くも我が靜岡縣下に行幸遊ばされ、親しく民情の御視察を遊し給ふ。

聖上陛下には一天万上の大君として政務御多端に渡らせらるゝにも不拘、旬日の永きに渡つて縣下都邑僻村に至るまで限なく龍駕を枉げさせられ精細至り盡せる御視察を遂げ給ひ、或は各地各所に勅使を御差遣遊ばされ給ふ等大御

心の程に感泣せざるものなかりき。

縣民は齊しくこの千歳一遇の光榮に躍如として迎へ奉り恐懼して龍顔を拜す。山川草木感激の色を増し、その光榮に輝き獸禽亦 聖上の優渥に感泣す。御視察の範圍極めて廣かりしも吾が母校工業學校並に工業試験場が特にこの光榮に浴したるは之れ一に教育を重んじ給ふ大御心と産業御獎勵の聖旨に他ならざるものなるべし。

此の光榮の日こそ濱松に玉歩を印せられて第二日目——五月卅一日——

これ母校の永久に記念し奉るべき 聖上御臨幸の日なり。此の日は朝より晴れ渡り一片の雲もなく、五月の陽はきら／＼と薨に輝き、かげろうとなりて舞ふ庭内芝生の緑色かんばしく校内は水を打ちたる如く靜まりて一片の木の葉の影もなく掃き清められたり。清淨神嚴の氣溢るゝ校門には大日章旗翻翻として翻り君臨の時刻を待つ。私も此の輝き多き日、母校同志會代表として列立奉拜を差許され今か／＼と感激の高鳴りに胸をどよめかし時の至るを待つ——あゝ忘れもすまじ十時二十五分——

響き渡る御召自動車の爆音。校内くまなく響き渡る振鈴——あゝ陛下本館玄關御着——

校長御先導にて御座所の玉座につき給ふ、一秒一刻と時計の針は進む。此の日光榮なるかな山本校長には教育産業兩方面の功勞者として單獨拜謁を賜り、學校の教育方針並に試験場の事業の概要を奏上致さる。斯くて校長御先導申上げ御座所より染織、圖案、建築の各標本を陳列せる講堂に成らせらる。吾等奉拜者は講堂西出口に増列せしに講堂内に於ける校長の御説明の一言一句戸外に洩れ、御説明に對し一々御肯き遊ばさるゝ龍顔目のあたり仰ぎ奉り御英姿彌尊く拜され、たゞ茫然として感激の胸を高鳴らすのみ。講堂より機械工場に玉歩を進ませらるゝ時親しく吾等奉拜者に對し御會釋を賜ふ。心は極度に緊張し息づまるを覺えたゞ／＼感泣の他なかりき。あゝ神の如き御尊影其の身九重の雲の上にお在しますを工場の諸作業を親しく御巡覽遊ばさるゝ常等に君民一眸の御聖旨を民草の上に垂れ給ふこ

とに努めさせらるゝその御仁慈の至情誰か感泣奮起せざらんや。

斯くして定刻五十五分に至るや再び鳴り渡る振鈴、やがて起る爆音御召車校外に去りしばらくして、校内サイレンの音勇ましく鳴り響き無事御還幸遊ばされたるを告ぐ!! あゝ五月卅一日——

此の日こそ母校の永遠に記念すべき日なり。吾々は此の日の光榮を永遠に傳へ、此の日の感激此の日の緊張を久遠の理想となし、濱工をして天下に名をなさしめ御聖旨に副ひ奉り又此處に新たなる敬虔の念を捧げ 聖上の御平安、皇運の無窮ならんことを祈り奉り、翻つて内に省み聖慮を推戴し奉り質實剛健の氣風を作興し、粉骨碎身以て國家に力を致さざるべからず。

光輝ある母校の歴史を忘れるな

卒業生 太 田 眞 禪

自分が巢立つた母校を追憶することは楽しいことです。それが希望に満ち満ちた少年の日であるが故に尙更です。小倉の服に白いゲートルを付けて、雨の日も風の日も、よくあの石の校門をくゞつたものでした。樺色に塗られた木造の校舎、春になると、萌え黄色に敷きつめられる芝生の園、車座になつて幼い眞理を語合つたものでした。實に母校は私達の生涯の親友であり、生涯の導主なのです。

昭和五年五月三十一日。即ち、創立日尙淺い我が母校に早くも空前絶後の歴史的榮光を添へた記念すべき日。それは畏くも 聖上陛下の行幸を辱ふしたことです。これは我々全校友に取つて實に感激措く能はざる所で、我

々は其の御聖恩に對して深く感謝し奉らねばなりません。且、工業方面の學校で行幸を辱ふしたのは、僅かに二三の先例あるに過ぎぬことを思ふとき、我が母校の名譽の如何ばかり大であるかを深く考へずには居れません。然し我々全校友はこの喜びと感激とで他を忘れて宇頂天になつてはなりません。この光輝を添へた名譽ある歴史を益々光輝あるものに導いて行かねばなりません。即ち我等の母校を發展せしめなくてはならぬのです。然らば母校を發展せしめるにはどうしたらよいか、それは先づ第一に自己の發展です。この我等全校友の自己發展の原動力は我等を包含する大母校の發展の原動力となるのは當然の理です。しかして發展の内容は、よき方への進歩であり、よき方への擴大であります。自己をこのやうに導いて行くことは、消極的には、この度の母校の名譽を汚さぬための道程であり、積極的には母校發展の曙光をなすものであります。然らば自己を善き方へ發展せしめ、善き方へ擴大するにはどうしたらよいか、これは「努力」の二字に盡きるでせう。即ち學窓にある者は學業に、社會にあるものは、その職業に、各自分に應じて力を盡すのです。斯くして徐々に自己發展が遂行されて行くのです。

母校を發展せしめる第二番目の要件として全校友が母校愛を持つことです。我々卒業生校友は、母校から受けた種々の印象を忘れないやうに、母校を愛することを忘れてはなりません。それには母校を時々訪問することが必要です。何故ならそうすることに依つて、微少ながら自己が母校に盡さねばならぬ或る義務を發見するからです。ことに運動部の先輩などは、多少の犠牲を割いて在校校友の指導上達を計つていたゞきたいのです。それがすでに愛校心なのです。

要するに私達はこの度受けた母校の名譽を汚さないために、その分に應じて奮闘努力し益々愛校心を養ひ、光輝ある母校の歴史を不朽の殿堂の中へ導いて行かねばなりません。

奉拜感激録 (略記) 順序不同

山本校場長 (御先導御説明)

玄關ニテ最敬禮ヲナシ御答禮ノ他ハ何事ヲモ腦裡ニ印セザリキ。御便殿ニテノ奏上ハ稍小聲ニテ句切り確實ニナセリ。圖案作業ノ場所ニテハ敷居ニ御手ヲ掛ケサセラレ熟々御覽遊バサレシガ如シ。天覽品中縮ハ御手ヲ御觸レ遊バサル。佛蘭西ヨリ本校ヘノ賞狀ハ御朗讀遊バサレタリ。ソノ他天覽作業等ニツキテノ御熱心ナル御巡覽ノ御有様ハ別掲校場長所感ニ奉記セリ。親シク天顔ヲ拜シ得タリシハ力織機工場ト他ノ一ヶ所ニテ漸ク御横顔ヲ拜シタルノミナリキ。

山田 教諭 (校門外)

豫行演習ノトキ數名ノ落伍者ヲ出シタガ當日ハ輕微ノ腦貧血患者ヲ一名出シタルノミナルハ如何ニ全員ガ緊張セルカヲ示スモノデアル。着御ノ時ハ校旗ニ對シ、又發御ノ時ハ全列ニ對シ御答禮イトモ御懇ロニ遊バサレタ。

平石 教諭 (校門内、列立拜謁等)

玄關前ニテ御寫眞撮影ノ際、ワザ／＼御停止遊バサレントスル御様子ナリシモ校場長ノ御先導ニテ入御アリタリ。多數自動車ノ入換作業ニテ玄關先ハ雜音高カリシヲ甚ダ恐縮セリ。圖案作業ニテ圖案構成機ハ御熱心ニ御覽アラセラル。

權田 教諭 (家族奉拜場)

老人婦人子供等ナリシタメ不敬ニナラザル様、又可成ヨク奉拜ノ出來ルヤウ苦心セリ。僅カ三間餘リノ列ニ對シ御親シキ御態度デ而カモ二回モ舉手ノ禮ヲ賜ハル。一同感涙ニ袖ヲ絞ル。

外山 教諭 (活動寫眞班)

活動寫眞班誘導ノ案ソノ朝マデ全然立タズ、焦慮困惑セリ。校門御通過ノ際奉安殿ノ御紋章アタリニ御目ヲ停メラレタルガ如シ。

平川 教諭 (織工場)

神機織殿ノ内部ヲ殊ニ御熟覽アリタルガ如シ。

坂本 技師 (織工場)

御順路ナラザル撚絲工場ニ畏クモワザノ玉歩ヲ運バセ給ヒ、御先導ノ校場長モ困惑サレシガ如ク見受ケタリ。

内田 教諭 (織工場)

機械ノ安全ニ對シテ特ニ配慮セリ。豊田式織機ノ御説明ハ豫行演習ノ際ヨリモ稍早キ様ナリキ。

大井 教諭 (建築科工場)

陛下ノ御作法中室内ト室外トノ御區別實ニ御鮮ヤカニテ御脱帽御着帽イトモ御正確ナルニハ唯々感激ノ外ナカリキ。

榊原 教諭 (建築科木工場)

室外ト室内トノ兩方ヲ督シ、且ツ双物類ヲ使用スル作業ナレバ懸念一入ナリキ。通御ノ廊下ハ室内ヨリ一尺以上モ低キ故恐縮シタリ。鉤掛ケ柄穴彫リ等イトモ御珍ラシゲニワザワザ近寄り御覽遊バン給フ。

中江 教諭 (建築科材料試驗室)

天顏明カニ拜シタレドモ當日ノ自己ノ心中ハ全ク夢ノ如シ。

麻生 技師 (校門内等)

當日ノ校場長ノ御説明ハ明瞭ナリシモ稍速カリシガ如シ。圖案中ノ伊藤助手ハ玉體餘リモ近カリシタメ恰カモ太陽ニ直面シタルガ如キ感ヲナセリト語レリ。陛下ニハ圖案ハ斯ク描クモノナリヤト侍從ニ仰セラレシ由ナリキ

岡尾 技手 (試驗場圖案部)

菊花ト草花ヲ二ツ描ク間御近ク天覽遊バサル。

寺田 技手 (試驗場能率部)

御下問アリタルトキハトヤセン斯クヤセント心構ヘタリ。

矢田教授囑託 (校門外)

御車内ノ天顏ヲ拜サントスレドモ自然ニ頭下リテ拜シ得ザリキ。御親閱場ニテハ餘リノ有難サニ思ハズ落涙スルコト三度ナリキ。

井上 教諭 (試染工場)

染料トシテ「メチルバイオレット」ヲ擇ブ。コレコノ

色ハ紫ニシテ尊嚴ノ象徴ヲ具備シ且ツ、生徒實驗トシテ容易ナリシニヨル。當日病氣ノタメ遠慮申セシハ遺憾千萬ニシテ又恐懼措ク所ヲ知ラザリキ。其ノ頃思ハズ一句――

五月雨の晴れて御幸の日も近し。

伏見 大尉 (校門外)

御車ガ兵器庫南方デ方向ヲ換ヘラレシヨリ我々ノ御迎ヘ申ス近傍マデ御車中ヨリ校舍全景ヲ御熟視遊バサレシヤウニ見受ケラル。創立既ニ十年、濱工標語トシテ強調シ來リシ『環境ノ美化整正』モ茲ニ至リテ榮光窮マレリト謂フモ不可ナラザルベシ。

泉頭 教諭 (活動寫眞班等)

郷里ヨリ氏神ノ守護札ヲ送り御奉公完カレカント祈念シテ下サレシ兩親ガ都合上奉拜出來ザリシヲ遺憾トセリ

宮脇教授囑託 (校門内)

職ヲ本校ニ奉ゼシタメコノ光榮ヲ得且ツ家族亦コノ寵光ヲ辱フス。感極リテ嗚咽アルノミ。

縣 校醫 (校門内)

玄關ニテ余リ間近ク陛下ヲ奉拜シタノデ、却ツテ視線ガ亂レタ位デアツタ。陛下ノ御巡幸ハ縣民誰レモガ全ク豫期シナカツタコトデアリ、又タトヒ御巡幸アツテモ自分ノ如キ無位ノ一町醫ガカク御側近ク天顏ヲ拜スルガ如キハ全然夢想ダモシナカツタ。「草莽ノ臣彦九郎」ト言ヒ違ク皇居ヲ拜シタ彼高山氏ニ比シテ何タル光榮ナコトデアラウ。

加藤齒科校醫 (校門内)

思ヘバ本校校醫デアツタ幸福ト聖代ノ有難サニ感泣スルノミ。

鈴木 教諭 (校門内)

鮮カニ在ス御態度ハ實ニ若ク榮ユル日ノ本ノ象徴ト拜シテ感激ス。皇室ヲ中心トシ奉リ教ヘ行ク歴史教育者トシテ一段ト力強キ信念ヲ靈感ス。

寺田 職工 (試驗場漂白工場)

コノ無上ノ光榮ニ身ノ縮マルヲ覺エタ。

吉田 助手 (織工場)

七情以上ト申シマセウカ、沿道ニテ鹵簿ヲ奉拜スルノトハ全然別ナ感激デコレハ筆舌ヲ超越シテキマシタ。

金原 助手 (織工場)

御臨幸ノ際ハ畏クモ物ノ數ニモ入ラヌ私共スラ御蔭デ間近ク奉拜シ、有難イヤラ、勿體ナイヤラデ胸一杯デス

森下 助手 (建築科製圖室)

製圖板ハ生徒ノ方ニ傾斜シテキルノデ陛下ハ前方ヨリ一生徒ノ頭上ヲ見下サルガ如ク御覽遊バサレタ。定メシコノ生徒ハ呼吸モ何モ止ンデ無我ソノモノデアツタデセウ。

坂田 給仕 (小使室東側)

御神前ニ額イタ心地デ何モカモ忘レタ夢ノ様ナモノデアツタ。

澤井 給仕 (試験場)

左方ノ廊下デ砂利ノ音ガシテ來タノデ思ハズ頭ガ下ツ

タ。勤悻ガ高マル、杉山先生ガ號令ヲ掛ケラレルト恐レ多イコトナガラ陛下ニハ御脱帽ノ上御會釋ヲ賜リツ、御進ミニナツタ。コノ時ノ心地ハ到底筆舌ノ盡クストコロデハナカツタ。

天野 小使 (小使室東側)

子供ノ時ニ明治天皇様ヲ奉拜シタガ、當時ハ御通路ヨリ遠ク去ツテ席ノ上ニ下座シ頭ナド上ゲテ天顏ヲ拜シタナラ目ガ潰レルトサヘ言ツタモノダ。今回ハ給仕小使ノミガ奉拜シキタノニ御答禮遊バサレタトハ。感涙ハ老ノ兩頬ニ傳ハツテ止マナカツタ。

御臨幸記念事業

(昭和六年二月十一日記元節佳辰ヲ以テ完了)

- 一、御臨幸記念碑建立(學校及試験場) 一一 基
- 一、御臨幸活動寫眞フィルム購入 一千九百呎
(本校場内濱松御親閱場及伊豆天城山行幸)
- 一、御座所ノ整備
- 一、御臨幸記念誌發行
- 一、濱工行進歌懸賞募集(別掲)

御臨幸餘記

教諭 榊原助太郎

櫻も散つて春暮れ行く頃、何處からか或は御臨幸を仰ぎ得るかも知れぬとの噂が立ちましたが、また冗談でせう。先にもそんな噂で騒いだ時がありました上位で、別に念頭にも置かなかつたのが愈々行幸主務官の下檢分と決定し、全く意想外と申すより他ありませんでした。然し下檢分の準備としての清掃整頓も御臨幸決定後のそれに比すれば、直接の目的が異なるだけに確かに低壓でした。

御臨幸決定の上でなら、それこそやり甲斐がどんなにあることとせうと私等は無意識の中に祈つてゐたのでした時は順調に移り、「疑念」「不安」等を除き「歡喜」「緊張」を置き換へてくれました。やがては心の奥底よりすべての雑念をも抽きとり、純にして強い感激のみ留めて行きました。此の度の大事は「先生と生徒」「校長と職員」「校場と世間」などいふものとスケールを違へ、オール濱工、濱試の分子磁石のNSは恐ろしいまでにピツタリ方向を描へてのこととありますからその磁力の強さたるや何物をも磁化せずんばあらずといふ位でした。「ひたすら」とか「いのる」とか言ふ語もここで初めて味ひ得たやうに思ひました。校場内の萬事は校長の反映に他ならざるは勿論だとは言へ、この度の大任に就いては事が絶對且空前であるだけに、協力援助により無事にこの重任を果されんことを祈りました。されば校長の無上の光榮などお喜び申す餘裕はありませんでした。

○ 例年行ふ記念日や運動會ですらその準備は並大抵のこ

とではないのに、今度の御臨幸は全く千載一遇にして又無上の事柄故一同が眞剣になるのも道理です。而かも尙一つの困難は準備期間の極く短いことでした。かくて準備打合會議は連日晝は勿論深夜まで開かれ、家を忘れ身を忘れ寝食も忘れて努めました。或は其の筋へお伺ひを立て或は他に前例を尋ねて参考となし、分擔して準備にかゝりました。その都度配付される謄寫刷りは、集めて實に見事な大冊子となつた位です。

ここに各係の仕事の大體を記せば次の如きものです。先づ總務、庶務の兩係は全般的に互り心を廣く配はり中多忙なものでした。貴賓室の係は、御便殿等の御調度品等を整へるのですが、一體どんな御品を如何様に整へ置いてよいものやら、これ又一一慎重な努力を要したことでせう。奉迎送係の方ではこの多忙中を割いて尙御親閱の豫行演習も致され服装のことなど細かい點まで苦心されました。次に献上品係では如何なる品を献上すべきかを定めるのが一大苦心であると同時に之を調製するが亦中中です。慎重審議の結果本校場の御寫眞帖献上と決

まつたのでした。天覽品を選定し、之を講堂に陳列する係も亦人知れぬ苦心を要します。本校場として特色あるもので此の度の御臨幸の御趣旨にそひ奉る物品でなくてはなりません。これが選擇、編成は幾度やりなほしたことでせう。而かも短期間の仕事ですからその苦勞の程は尙更でした。

工場内の機械の安全にして事故なきことは當日は絶対に必要で不可抗力も許してはなりません。従つてこの方面の係員は夜も夢にまで心勞されたことでせう。又設備係はやれベンキを早く乾燥させよ、やれ渡廊下を建てよ、やれ便所が新築して欲しいと他係より注文は殺到する。猶豫は禁物、直ちに斷行。終日人夫は亂れ入り、材料は隨所に持込まれて四散するし、時は徒らに移り地球の廻轉が一週間も止まればよいと念する位でした。衛生係の全校場員保健上の苦心も全く御氣の毒な位でした。一人でも事前に病人が出たら折角の御臨幸も御遠慮を御願ひ申すことになりませう。かくなつてはこれこそ實に血の涙も尙及ばないことですから、唯出る者は出ると運命に従ふ

ことは出来ません。健康診断、豫防注射、各所の消毒、大變な仕事でしたが幸ひ一人の病人らしい者すら生じなかつたのは、この係の御努力によることでせう。最後に警備係のことですが、これ又案すれば際限のないことで夜の目もろくに眠れぬ仕事です。思想悪化の極度に達した今日、如何なる不逞の徒が侵入するやも知れず、尙火災でも生じたら何とも申譯はない次第です。警備は期間を三階段に分ち、愈々接近すれば益嚴重を加へて行きました。兩正門に門衛を置き出入の人を誰何し、夜は、正規に臨時増員して宿直をなし、尙奉仕の宿直や奉仕の上級生で徹宵して警戒致しました。初夏とは言へ更け行けば夜は物凄く寒い。暗い校舎の陰を外套を着て廻る影は全く涙なしでは見られぬ情景でありました。

右十係及生徒等の献身的奉仕は其の甲斐あり、幸にも期日までには所期の任務を果し得たのですが、思へばこれが神業でなくて又何んでせう。

茲に今一つ特筆したいのは御臨幸豫行演習のことです。當日は全く有機的の御段取で、そこに些の停滯、齟齬、

乃至尙早等あらば申譯はありません。作業の廻轉が一旦開始すればその三十分間は何れも描つて廻轉し、而かもそれは正しく三十分で完全な一公轉を必要とします。

これは延いては次の御臨幸先に影響あり、何んとも申譯のないことです。主役たる校場長の人知れぬ苦心は別掲所感中にある通りですが、これも、全員が、努力綜合の産物としてではなくては不可能です。ここに豫行演習の絶対的必要にして、全員が、反覆練習した所以もあるのです。着御前から發御後まで一糸亂れず整然として動作をなし、伏見先生の捧持せる、日章旗これ即ち畏くも陛下と信じ奉つて練習したればこそ後に思つたことでした。あの時響くベルの音には一種格別の感激を持ち、心の奥底から出る敬禮の聲、轟々たる工場瞬時にして又林の如き静けさに返へるなど、他から觀たならば練習とは思はず實に凄じ位であつたらうと思ひます。當日の信號と時刻は次の如くでした。

第一ベル(十時二十二分)

先驅御着 氣を付け(支圖に面す)

第二ベル(十時二十五分)

御着登 最敬禮(作業開始)

第三ベル(十時五十四分)

氣を付け(作業中止)

第四ベル(十時五十五分)

御發聲 最敬禮(不動の姿勢)

第五ベル(十時五十七分)

休め(その儘)

第一サイレン(十一時)

解散(晝食、御親閲出發準備)

第二サイレン(十一時三十五分)

集合(萬歳、出發)

次に當日供奉扈從された主なる方々を記すれば

(敬稱謹略)

供奉員

内大臣伯爵	牧野伸顯
宮内大臣	一木喜徳郎
侍從武官長	奈良武次
侍從長	鈴木貫太郎
侍從職御用掛	西園寺八郎
宮内書記官	木下道雄
静岡縣行幸主務官	

宮内大臣秘書官

兼宮内書記官

侍從

皇宮警視

扈從員

静岡縣知事
内務大臣
商工次官
濱松市長

大金益次郎

永積寅彦

榑田順藏

白根竹介

安達謙藏

横山勝太郎

中村陸平

無事還御ありて一同天も墜ち地も挫けよとばかりの萬歳を唱へた後の心地は思へばその朝の心地に比べて何と輝かしく變つたことせう。身に錦を飾つて故國へ凱旋する勇士の心地か。乃至は苦心力作の答案を、提出して試験場を出た瞬間の學生の心持か。いやそんなものではなかつた。しかしこれこそ言語文章に絶した感激と言ふより他はなかつたのです。中食の味はわからず済し、先づ何は兎まれ角まれ、御座所の御跡其他の室を拜見せずんばあるべからずと早くも廊下は生徒の長蛇の列でありました。茲に謹み御室の御有様等を記すことと致しました。

た。(別掲御巡路略圖参照)御室は

1. 御座所
2. 御手洗室
3. 宮内高等官室
4. 宮内判任官鹵簿係室
5. 扈從高等官室
6. 近衛將校室

の六室で何れも本館階下にあります。廊下及各室は數回の消毒掃除の上除塵油よく塗り込み、磨かれた鏡の如く、天井、壁、柱等は全部落付いた面かも温か味のある色のペンキ塗とされました。御便殿は如何かと拜すれば、私等の期待したとは大差で何一つのお飾りもなく、御質素そのものです。在來の粗雑な窓等その儘とし、それに薄いレースをかけ窓掛類も實に粗末なものです。天井は金屬板貼となり、中心飾よりは普通の電燈吊されたのみで實に懼多い極みです。壁は矢張りペンキ塗りで床のノリウムと相待ち一種、森嚴味のある調和を保ち、その上の緞通は特に綿が用ひられてありました。御調度品としては、御持参になつた御卓子と、こちらにて御備へ申

した御椅子、御花臺、御屏風のみで實に御簡素なものです。生花は榮え行く日本の初夏を象徴するあやめ一鉢のみですがその紫色と金屏風等と、全く一分の緩みもない尊さでありました。御隣りの御手洗室はペンキを塗り換へたのみでした。その他供奉扈從の方の各室は何れもテーブルに白布をかけ、それに極簡単な盛り花等飾られたのみでした。

かやうに御質素であらせられることが却つて尊嚴さを増し、ここにも有難い御旨の一端が拜されるやうに思はれて何とも畏き極みでありました。

御臨幸記念式歌解説

第一章 解説

我が日本は神國であります。上皇室は我等國民の宗家で在し、恐れ多くも我等國民は皆皇室を宗家と崇め奉る分家であると考へ申すことも出来るのであります。

神代以來幾千春秋國家の家長に在します 天皇は恰も

日輪の碧空に懸れるが如く我が國土の上に我が民族の上に照り輝いてをられ莊嚴の神、現人神として我等國民の思想の核心に鎮まりますのでありまして純日本精神を形作り神代ながらの神國思想を繼承して参りまして未來永劫に子々孫々に傳へて参るべき滔々として變はらざる清い流であります。

皇紀二千五百九十年、昭和五年五月卅一日は我が校にとつては未曾有の有難い日でありまして 天皇陛下親しく文武の大官をお率き遊ばしまして我が校の産業教育を御覽遊ばされたのであります。何といふ光榮でありませう。何といふ感激でありませう。

我が學舎に立たせ給ふた 陛下の凛々しい御姿を拜し奉りまして當時三百有余の生徒は御稜威にうたれ青春の血潮はたぎり立つたのであります。

嗚呼五月卅一日！ この日こそ永久に我が校の歴史に一段の光輝を添へたことを私共は自然に覺えざるを得ないのであります。

第二章 解 說

我が日本は現下世界の國家の中で最も世界的國家であることを何人も認める所であります。これはとりもなほさず我國家の大政を御統治遊ばす 天皇陛下の御精勵只管國家の進運を御計り下さる御恵みでありましてこの僻地の我が學校にまで御視察を忝ふしたのは産業教育振興の御獎勵を給ひ全日本に對して斯道御施政の參考としての資料を御蒐集遊ばしたのに外ならぬのでありまして我が校が幸にこの選に入りこの名譽を勝ち得直接にこの御恵みに浴するの光榮を得たのは又と有り得ない事實であり感激であります。

嗚呼我が校に御立ち遊ばされた恩愛の神、慈悲の神たる 陛下の御影は我が校と共に幾千代かけて消え去らぬ貴い御結縁でありまして我等はこの光榮を渾身に刻みつけて我等の進みつつある學業に精勵し以て 陛下の大御心に副ひ奉り 陛下の赤子としての光榮を肝に銘じて一意専心日本國家に盡す御奉公の赤誠が溢れざるを得ないのであります。

奉迎日誌抄

- 昭和五年 四月十九日(土) 御臨幸下檢分ノ腹案トシテ縣立濱松工業試験場内定ノ旨發表アリタリ。
- 四月二十日(日) 白根本縣知事本校本場ニ來訪サル。
- 四月二十一日(月) 木下主務官下檢分ニツキ校場内大清潔大整頓ニ關シ打合會議ヲ開ク。
- 四月二十二日(火) 終日作業、午後會議アリ。
- 四月二十三日(水) 下檢分ニ關シ校長ヨリ諭告アリ。服裝検査打合會議。
- 四月二十四日(木) 木下主務官午前九時半ヨリ同十時四十分マテ學校試験場下檢分サル。放課後天覽品準備打合會議アリ。
- 四月二十五日(金) 御臨幸事務打合會議アリ。山本校場長木下主務官ニ隨行ス。
- 四月三十日(水) 御臨幸準備ニツキ平石、麻生兩氏大阪市立都島工業學校へ出張ス。午後一時ヨリ御臨幸打合會議アリ。
- 五月一日(木) 御臨幸ニ關シ藤野教育課長來校サル。
- 五月二日(金) 出張中ノ平石、麻生兩氏歸濱サレ午後ソノ報告アリ御臨幸事務分掌規程定メラル。係ハ左ノトトセリ。
- 總務係、庶務係、貴賓室係、奉送迎係、献上品係、天覽品係、

- 警備係、衛生係、設備係、保繕係
- 五月三日(土) 午前八時ヨリ講堂ニ於テ山本校場長ヨリ全員ニ對シ御臨幸ニ關シテ諭告アリ。各係任命アリ。
- 五月五日(月) 午後三時ヨリ同十時半マテ會議アリ。御臨幸確定發表「號外」
- 静岡縣立濱松工業學校
- 静岡縣濱松工業試験場
- 五月六日(火) 御臨幸公式發表ヲ校場内全員ニ布告ス。聖上御臨幸ノ御平安ヲ祈ルタメ全員二分シテ五社、縣居兩神社ニ參拜ス
- 五月七日(水) 御親閱分列式ノ標兵選定ノ件決定ス。
- 五月八日(木) 御親閱ニ列スベキ生徒ノ分列式演習ヲ始ム、天覽品打合會議アリ。
- 五月九日(金) 校内場内ノ設備ノ整理整頓ヲナス。各係ニ於テソレソレ係事務作業等ノ完成ニ努ム。本日ヨリ夜間一人ヲ設ク。宿直員一名ヲ助手ヨリ増員ス。
- 五月十日(土) 分列式豫行演習、チアス豫防注射ヲ施行ス。
- 五月十二日(日) 再度檢分ノ豫定ナリシ木下主務官時間ノ都合上明日ニ延期サル。校長訓示。
- 五月十三日(火) 木下主務官午前九時半來校サル。入門許可證ヲ一般ニ下附ス。
- 五月十四日(水) 兩正門ニ門衛ヲ配置ス。本日ヨリ奉仕宿直員勤務ス。御便殿天井張換工事ニ着手ス。此ノ頃校舎内外ノ清掃整頓ノタメ人夫多數入り作業セリ。

五月十五日(木) 山本校場長縣廳ニ出張シ、正式ニ御臨幸ニ關シテノ行事一覽表ヲ差出シ、ソノ指揮ヲ乞ヘリ。御臨幸ノ件生徒父兄ニ通知ス。

五月十七日(土) 全場内外ノ大掃除消毒ヲ施行シ、午後第二回目ノ豫防注射ヲ行フ。

白根本縣知事本校場ヲ巡視サル。

五月十九日(月) 午後一時ヨリ上級生ヲ御親閱ニ關スル活動寫真見學ノタメ高工ニ引率ス。

五月二十日(火) 本日限り諸修繕等一ト先ヅ終結ノ豫定ナリ。

合會議ヲ開キ、職員家族等ニ奉拜ノ通知ヲ出ス。

五月二十一日(水) 第三限以後大掃除消毒。本日ヨリ放課後ノ校外生徒取締リトシテ七級生ヲ四班ニ分テ自治的奉仕ヲナサシム。

五月二十二日(木) 諸人夫等本日限り切り上グ。天覽品陳列着手

五月二十三日(金) 大掃除消毒ト前日ト同ジ。二年以上高射砲練兵場ニテ御親閱豫行演習ヲナス。

五月二十四日(土) 夏服用。服装検査ヲナス。天覽品陳列終了此ノ頃ヨリ各種ノ寫真撮影開始セリ。

五月二十六日(月) 本日ヨリ授業中止、午前御臨幸正式豫行演習ヲナス。午后ハ西部御親閱大豫行演習ニ全生徒參加セリ。警備一層嚴重トナル。

五月二十七日(火) 御臨幸及御親閱豫行演習ヲナスコト前日ト同ジ。

五月二十八日(水) 豫行演習益々深嚴サヲ加フ。大體スベテ好成績ナルガ如シ。

五月二十九日(木) スベテ前日同様。大掃除等ハ毎日行フ。當日ノ豫定ニ付キ生徒ニ發表ス。

五月三十日(金) 午後高射砲聯隊前ニ 聖上陛下ヲ奉迎ス。

五月三十一日(土) 御臨幸當日

早朝ヨリ全員出動、諸準備些ノ遺漏ナシ、全員ハ早クモ午前八時龍禪寺小學校校庭ニ集合。九時ニハスベテノ部署ニツキ、只管御着裝ヲ待チ奉ル。十時四分高工發御ノ電話ヲ得テ全員一同心躍ル。十五分前臨オートバイ着。十時十九分 神嚴靜寂ノ裏ニ聖駕御着。校門外ニハ校旗ヲ先頭ニ伏見先生指揮ノ校場代表トシテ一二年生等奉迎送セリ。

御發聲マテノ大略ノ御順序ヲ奉記セバ

- 一、校門外奉迎
- 一、活動寫真撮影
- 一、校門内奉迎
- 一、御寫真撮影
- 一、校場長支關奉迎御先導
- 一、御便殿入御
- 一、校場長拜謁、奏上、約四分間(奏上文別掲)
- 一、有資格者列立拜謁
- 一、圖案科作業天覽(天覽作業一覽別掲)
- 一、講堂製作品天覽(天覽品目別掲)

六月三日(火) 校場内一般公開、午後三時半ヨリ同八時半マテ兩職員行幸所感發表會ヲ開ク(奉拜感激錄)

生徒職員ノ大部分五社神社ニ御禮參拜ス。

六月四日(水) 公開前日ニ同ジ。縣居神社ニ御禮參拜ス。

六月五日(木) 午前中復舊作業、午後休業、山本校場長全員慰勞會ヲ主催セラル。

一、活動寫真及御寫真撮影

一、職員家族及同窓會代表者奉拜

一、活動寫真撮影

一、紡織工場天覽(織殿特ニ天覽)

一、建築科工場方面天覽

一、捺染室御巡覽

一、試驗場内御巡覽

一、御寫真撮影

一、縣下西部特許發明品天覽

一、染色工場御巡覽

一、整理工場御巡覽

一、活動寫真撮影

一、建築科、標本家屋天覽

一、奉送(諸員ノ位置奉迎ノ場合ト同ジ)

時ニ午前十時五十分ナリ。

全員サイレンノ合圖ニテ集合、天皇陛下萬歳ヲ三唱シテ解散直チニ晝食、隊伍堂々ト高射砲練兵場ニ向フ。御親閱時刻午後三時十分ヨリ同五十分マテナリ。本校生徒ハ袋井商業學校及池新田農學校ト第五大隊ヲ編成セリ。第一學年ハ拜觀ヲナス。夕方全員飯校祝賀ノ菓子ヲ分チ安堵セリ。山本校場長御禮言上ノタメ出頭ス。

六月一日(日) 午前午後各一回ツ、高射砲聯隊前ニテ奉迎送ス。

六月二日(月) 休業ス。

懸賞濱工行進歌々詞當選者發表

○當選者

第壹等 卒業生 榎谷有進
 第貳等 建築科 第三學年 内田保夫
 第參等 紡織科 第四學年 石橋武雄

○選外佳作者

色染仕上科 第五學年 藤森繁夫
 圖案科 第二學年 岡本滋之
 建築科 第二學年 寺澤光二
 紡織科 第三學年 伊與田剛
 以上

濱工行進歌々詞三篇

豫て募集中なりし本校行進歌々詞優秀篇に對し更に本校に於て修正を施し之を適用せんとす。行進歌々詞左の如し。但し歌曲は目下選定中なり。

○濱工行進歌々詞 (高き校風)

第一章

心の眞綾し行く 旗の響きは曳馬野に
 いや高らかに木霊して 我が同胞は勵むかな

第二章

心のたくみときまぜて 浸す糸目はいや長く
 畏きかぎり九重の 雲居の宮に聞しめす

第三章

美はしきかな我が操 描く歴史の柱にて
 榮ある我等の譽なる いそしみ學ばん諸共に

第四章

聖の教尊みて 匠の業のそのごとく
 高き校風築かんと つとめ合ふかな同胞は

第五章

月の桂は折るゝとも おほし立てたる濱工の
 高き桂は折るゝまじ はげまんなかなや諸共に。

(原作者 榎谷有進)

○濱工行進歌々詞 (校旗は清し)

第一章

黒潮香る濱松の 渚の松に色はえて
 燦と輝く濱工の 校旗は清くいや高し

第二章

雲拂はれて空和み 赤石の峯富士の雪
 自然の姿偉大なる 健兒の血潮燃ゆるかな

第三章

地に露結び水流れ 郷に偉人の影潜む
 生命の土を踏みしめて いでや歌はん我意氣を

第四章

五月の空に光添ひ 卯の花匂ふ學園に
 聖帝御幸賜はれる 光榮ある我等幸多し

第五章

見よ感激に咽びつゝ 平和の戦工業の
 勇士となりて雄々しくも 進む門出の勇ましさを。

(原作者 内田保夫)

○濱工行進歌々詞 (自治の園生)

第一章

東海道に工業の 譽を上ぐる濱松に
 蕩々ゆる我が母校 其の名も著き濱工ぞ

第二章

野邊の若草萌え出でて 生命伸び行く我が姿
 灘の高波躍り立ち 我等の胸に響くなり

第三章

響く心に棹さして 前途の海に乗り出づる
 健兒五百の氣は凝りて 高き希望に燃ゆるかな

第四章

自治の園生に光照る 五月の空に瑞雲の
 日の大君の御幸をば などか歌はぬものやある

第五章

嗚呼美しき此の光榮を 我等はいかで忘るべき
 想の翼いや猛く 理想の郷へ近づかむ。

(原作者 石橋武雄)

本縣西部御親閲式の狀況

遠くは吉野朝時代近くは戰國時代の古戰場として其の
名人口に膾炙せる我が三方ヶ原原頭には初夏の薰風松籟
に和して陽光新緑に照り榮え木々の梢も歡喜の音曲を奏
づる、今日しも昭和五年五月三十一日 我が

天皇陛下には本縣御臨幸を期せられて茲に本縣西部一市
六郡下の中等學校以上の男女學生、青年訓練所、男女青
年團、在郷軍人等二万有余の若き日東新國民の御親閲式
を遊ばさる。

各團員は感激と緊張とに充ち満ちて校旗團旗を薰風に
翻し式場に練り込む。午後二時半までには玉座を正面に
濱松師範榛原中學を第一線に整列し本校生徒第二學年以
上は袋井商業池新田農學校生徒と共に第五大隊を編成し
山本校長以下各學級係職員は生徒の列前に位置を取り伏
見軍事教官指揮をとる。更に青年團在郷軍人の順序に二
六十大隊の整列を終り女學生女子青年團四千余人の奉唱

隊は其の後方に位置し江木鐵相、小泉第三師團長始め同
地方の有資格者一千余名の陪觀者は玉座の後方兩側に長
く數萬の拜觀者は練兵場の周圍を圍む。本校第一學年生徒
は學級係引率して北部に整列拜觀せり。初夏の薰風に翻

る數百の團旗は相交錯して廣大五万余坪の場内は宛然繪
巻物を擡げたる壯觀を呈す。午後三時十分氣を附けの喇
叭冲天に鳴り響き軍樂隊の奏づる君が代の音曲に式場恰
も水をうてるが如く嚴肅の上にも崇高の雰圍氣を充滿す
折しも御召自動車は肅々として式場に進御

陛下には鈴木侍從長以下の供奉員を従へさせられ玉座に
着御あらせらる。白根本縣知事は御前に近く進み全員と
共に最敬禮をなし御親閲を仰ぎ奉る旨を奏上すれば林少
將の合圖に依つて壯烈なる分列行進は開始さる。

陛下には颯爽たる御英姿にて御直立舉手の禮を賜ひ軍樂
隊の奏する勇壯なる行進曲につれて大波捲れ行くが如く
次より次へ行進連続す。終れば女子奉唱隊は御前に進み
軍樂隊の伴奏にて「あまさかる鄙にはあれど」……綿々
として盡きざる喜びの奉迎歌と君が代を高らかに奉唱す

この時白根知事は再び御前にしつらへたる臺上に上り

天皇陛下萬歳を奉唱すれば全員之に唱和しさしもの練兵
場も一時乾坤搖ぐが如し。時に午後三時四十分なり。か
くて 陛下には御召自動車に乗御、午後四時五分天機麗
はしく行在所へ還御あらせられたり。

謹みて按ずるに 聖上今回の御巡幸中本縣東部西部の
兩所に於いて此の御親閲式を遊ばされ式中約四十分間畏
くも 聖上には御微動さへも遊ばされざりしは玉座上の
御足跡にて窺ひ知る事を得たり。嗚呼この神々しき御森
嚴なる御態度に對し奉り只々感極まりて言ふ所を知らず
上陛下におかせられて斯かる有難き御模範を示させ給ひ
しこととて此の親閲の光榮に浴したる若き國民は言ふに
及ばず拜觀する何人と雖も赤心以て 陛下の大御心に添
ひ奉る至誠奉公の念躍動するを禁ずること能はざりしな
り。

静岡縣下御巡幸御日程

第一日(五月二十八日)

宮城御出門	午前二〇・〇五
東京驛御發車	同 一〇・一五 (汽車中)
静岡驛御着車	午後 二・二五 (御餐食)
静岡御用邸(着御)	同 二・三五 二十分間
静岡御用邸(發御)	同 二・五五
静岡縣廳(着御)	同 三・〇〇 三十五分間
静岡縣廳(發御)	同 三・三五
知事の縣治奏上・縣下功勞者拜謁・静岡方面單獨立拜謁	同 三・四〇 十五分間
静岡地方裁判所(着御)	同 三・五五
静岡地方裁判所(發御)	同 四・〇〇 三十分間
静岡師範學校(着御)	同 四・〇〇
静岡師範學校(發御)	同 四・三〇
授業天覽・縣下生徒成績品天覽・静岡方面縣民奉拜	同 四・三〇 二十分間
縣立葵文庫(着御)	同 四・三〇
縣立葵文庫(發御)	同 四・五〇
静岡商品陳列所(着御)	同 四・五〇 二十分間
静岡商品陳列所(發御)	同 五・一〇
階上縣下一般の物産・階下静岡市の物産	同 五・一〇
静岡御用邸 着御	同 五・一五 御駐泊

第二日(五月二十九日)

靜岡御用邸發御 午前九・〇〇
 步兵第三十四聯隊〔着御〕 同 九・三五 三十分間
 縣立靜岡中學校〔着御〕 同 九・四五 四十分間
 中等學校長拜謁・水泳・武道・野球天覽 同 一〇・二五
 靜岡高等學校〔着御〕 同 一〇・三〇 三十分間
 教授の特別研究天覽・生徒萬歳三唱 同 一〇・三〇
 淺間神社〔着御〕 同 一一・一五 十分間
 神部・淺間・大歳・御祖神社假社殿御親拜 同 一一・一五
 靜岡御用邸〔着御〕 正午一二・〇〇 一時間三十分
 安東練兵場〔着御〕 午後一二・三〇
 靜岡地方御親閱 同 一二・四〇 四十五分間
 靜岡御用邸〔着御〕 同 一二・四〇 三十五分間
 靜岡御發車 同 一二・四〇
 江尻驛御着車 同 一二・四〇
 清水港築港〔着御〕 同 一二・四〇 二十分間
 港内天覽・ケーン進水天覽・消防隊御親閱 同 一二・四〇
 豐年製油清水工場〔着御〕 同 一二・四〇 三十分間

江尻驛御發車 同 四・五〇
 靜岡御着車 同 五・〇五
 靜岡御用邸着御 同 五・一五 御駐泊
 靜岡御用邸發御 午前九・一五
 靜岡御發車 同 九・二五
 燒津驛御着車 同 九・四五
 燒津海岸〔着御〕 午前九・五〇 二十五分間
 燒津驛御發車 同 一〇・一〇
 島田驛御着車 同 一〇・二〇
 大井川國道橋〔着御〕 同 一〇・五五 五分間
 橋上より連台渡天覽 同 一〇・五五
 農林省茶業試驗場〔着御〕 同 一一・〇五 三十分間
 縣立農事試驗場茶業部〔着御〕 午後一二・四〇 五十五分間
 島田驛御發車 同 一二・四〇
 掛川驛御着車 同 一二・四〇
 大日本報德社〔着御〕 同 一二・四五 三十分間
 國道東海道御西下 同 一二・四五
 縣立中泉農學校〔着御〕 同 一二・五〇 二十五分間

第三日(五月三十日)

中泉驛御發車 同 三・三〇
 濱松驛御着車 同 三・四五
 飛行第七聯隊(行在所)着御 同 四・一〇 御駐泊
 飛行第七聯隊(行在所)發御 同 四・一〇

飛行第七聯隊(行在所)着御 同 四・〇五 御駐泊
 飛行第七聯隊(行在所)發御 同 四・〇五

第四日(五月三十一日)

飛行第七聯隊(行在所)發御 午前九・〇〇
 高射砲第一聯隊〔着御〕 同 九・一〇 二十分間
 濱松高等工業學校〔着御〕 同 九・三〇 三十分間
 實験天覽・濱松地方縣民奉拜 同 九・三五
 縣立濱松工業學校〔着御〕 午前一一・〇〇 三十分間
 及同工業試驗場〔着御〕 同 一一・〇五 三十分間
 帝國製帽會社〔着御〕 同 一一・三〇 三十分間
 名古屋鐵道局濱松工場〔着御〕 同 一一・四〇 三十分間
 濱松市公會堂〔着御〕 同 一二・二〇 七十分間
 濱松方面單獨・列立拜謁・濱松地方特産物天覽 同 一二・二〇
 日本形染會社〔着御〕 同 一二・四〇 三十分間
 日本樂器會社〔着御〕 同 一二・四〇 三十分間
 高射砲第一聯隊練兵場〔着御〕 同 一二・四〇 四十分間
 濱松地方御親閱 同 一二・四〇 四十五分間

飛行第七聯隊(行在所)發御 午前八・〇五
 濱松驛御發車 同 八・二五
 辨天島驛御着車 同 八・四五
 辨天島棧橋發御 同 八・五三
 服部中村養蠶養蠶場〔着御〕 同 九・〇八 十分間
 辨天島棧橋着御 同 九・三二
 辨天島驛御發車 午前九・四〇
 燒津驛御着車 同 九・五〇
 燒津棧橋發御 同 一〇・〇〇
 佐久米湖岸〔着御〕 同 一〇・五五 五分間
 官幣中社井伊谷宮〔着御〕 同 一一・三五 十分間
 飛行第七聯隊(行在所)發御 午後一二・二〇 五十五分間
 濱松驛御發車 同 一二・二五
 沼津驛御着車 同 一二・三〇
 沼津御用邸〔着御〕 同 一二・四〇 十五分間
 沼津第四小學校〔着御〕 同 一二・四〇 二十五分間
 沼津方面單獨・列立拜謁・小學校兒童學藝品天覽・伊豆沼津地方 同 一二・四〇

工業試驗場

同	技	商	同	同	同	技	場	同	同	小	同	同	同	同	同	工	同	助
岡	岡	杉	坂	栗	平	麻	山	坂	小	天	鳥	鈴	杉	木	句	大	富	金
尾	村	山	本	原	澤	生	本	田	園	野	羽	木	本	村	坂	城	田	原
嘉	與	耕	相	信	政	治	又	美	哲	益	山	邦	え	ち	次	夫	助	は
美	與	作	敬	衛	吉	一	六	美	夫	藏	正	夫	い	か	夫	市	ぎ	

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
澤	峰	本	野	太	鈴	大	日	尾	寺	稻	杉	岡	池	次	渡	伊	鈴	氏	寺
井	野	田	末	田	本	橋	向	藤	田	垣	山	野	谷	廣	邊	藤	木	原	田
信	幸	ス	よ	い	歌	き	良	喜	英	銀	隆	武	正	守	馨	好	武	憲	武
男	貞	エ	し	さ	子	よ	三	太	一	藏	司	雄	雄	男	馨	夫	一	夫	至

工業學校生徒

色染仕上科第一學年

飯尾	兼子	鈴木	高林	松本	渥美	伊熊	喜多野	篠崎	鈴木	富田
巴	岸	孝	俊夫	佐夫	邦夫	正男	努	一男	里次	章次
磯部	河合	鈴木	高柳	守本	飯田	井後	金原	白尾	鈴木	永田
行雄	操	太良治	輝一	善一	貞夫	周雄	壹郎	林平	泰次	寧彦
伊野	鈴木	鈴村	竹山	山崎	伊熊	奥野	近藤	杉山	高橋	中村
瀬榮一	勝治	久司	金次郎	鎮	榮一	榮一	克己	清	强	忠
小野	鈴木	高田	中村	杉山	伊熊	小田	佐藤	鈴木	竹村	野末
豐作	勝次郎	怡	祝造	一郎	克己	喜久男	弘司	悦治	啓三郎	泰助

同	火	小	臨	縣	同
山	夫	使	時	派	同
本	加	加	職	遣	同
木	茂	波	工	員	同
き	彌	國	治	一	同
上	太	治	一	一	同
	郎	一	一	一	同

建築科第一學年

足土	大城	北野	鈴木	曾布	本間	水野	山下	秋山	小杉	高部
幸平	德次	禮三	一男	川	宣治	三男	宗一	誠次	泉	一雄
伊藤	大野	小林	鈴木	田口	松本	村越	山田	足立	笹田	武田
義治	牧雄	幸生	賢三郎	洋治	本京	春久	棟吉	謙三	有登茂	代三郎
遠藤	大山	杉江	鈴木	中村	松本	森	山本	磯部	瀨川	次廣
正巳	紀念治	正七	安太郎	匠	仲次	美雄	孝	清	清一	勇次
岡本	鴨川	鈴木	曾布	野末	御手	安川	山本	善一	高山	中村
武雄	盛一郎	男	川藤	德平	洗	政一	義朗	善一	太郎	靜雄

平野	鳥居	伊藤	落合	河井	鈴木	中根
武司	清夫	八郎	茂	正夫	初太郎	金作
藤田	後藤	今田	大橋	黒野	高井	松本
和夫	義雄	幹一	良雄	己三治	猛	政美
松山	植田	昶士	折立	佐藤	寺田	村松
庄一	晃士	三夫	貞夫	勝治	保	保
村瀬	内山	神谷	島崎	高柳	山本	博
桂治	重理	伊兵衛	信義	君美	博	

早川吉之助 久田 辰雄 松本 輝光 柳澤 鷹次
山村 英雄 千々輪 明

紡織科第二學年

青木 繁治 飯田彌三郎 大野 健一 岡田 完
小倉 弘三 小野田仙治 河合 清 河合 進
竹田 成尾 越川 秀治 源馬 勝美 清水 敏男
鈴木 稔 高林 忠夫 高山 菊次 高田 謹吉
富田 正一 中津川忠敏 藤下 正夫 藤田 蕭
増田 喜尾 松浦 政一 馬淵富美夫 開淵 禮治
宮木 達郎 宮崎 節男 村松 照夫 山崎 哲哉
山本 一惠 和久田善雄

色染仕上科第三學年

瀧美幸次郎 小田木一二三 小杉 則義 齋藤 安二
新村 光次 鈴木行之丞 鈴木 實 高橋 重平
高林 健治 鳥居 啓治 名波 健一 平野 糸平
米元 達雄

紡織科第三學年

池谷千之丞 石井 勳 伊與田 剛 江間 政巳
大崎 巖 大村 篤郎 加藤 湊 鎌田 助雄
河原 謙三 小池 勳 小池 茂次 小池 文雄

色染仕上科第四學年

飯田 英之 飯田 利照 奥田 實 尾林 文男
大石 正雄 大村 功 越川 幸一 鈴木 男
鈴木 一義 鈴木 莊一 鈴木 安丸 高田 村二
袴田 謙二 水谷 要 水野 清明 山田 吉三
山本 雅次 山本 良哉 吉田 幸雄 和久田源藏

紡織科第四學年

石橋 武雄 江間 春雄 小倉 辰雄 小倉 將司
大石 正八 大草 捷夫 影山 紀男 笹田有喜美
佐野 二三 鈴木 一男 鈴木 忠雄 鈴木 正男
高井 悦治 高林 實 高山喜八郎 千葉 和雄
中津川康二 中尾 勳 平野 益平 松井 保隆
山田正一郎 山田 陸兵

圖案科第二學年

足立 眞藏 岡本 滋之 小楠 勉 小野田 男
久保田宗平 小杉 寅雄 鈴木千之助 高柳 男
竹内 一平 溪山 敏 根木 貞雄 福智 重明
古谷 晟 松井 正次 水島善太郎

建築科第二學年

瀧美 馬治 青島 悦二 安間 大三 安藤 源藏
伊藤 寅雄 伊藤 廣 小木 曾千 大隅 治
加藤 眞一 川島 彦市 金原 足助 久保田 稔
小梢 朝治 近藤 儀一 齋藤 進 杉谷 佐一
杉本 朝治 田中榮三郎 土屋 敏郎 鶴谷 誠二
寺澤 光二 鳥羽山行夫 仲秋 順一 仲山 義雄
水野 金壽 森下 久男 森高 一郎 米田 靜雄
岡本 孫市

色染仕上科第五學年

伊熊 稻美 伊藤 正雄 伊藤 叶 北島恒太郎
齊藤 茂 清水 奎司 清水又一郎 鈴木 愛司
鈴木 光一 中川道之祐 藤本 敏雄 藤森 繁夫
山本一二三 山本 勝

紡織科第五學年

瀧美 茂 岡田 勘二 奥野 益榮 河合 豐
木村 清 小島 喜作 佐藤 孝一 佐藤 盛一
鈴木 薰 鈴木 弘 鈴木 福治 鈴木 正男
内藤 清 長田 一 中村 隆吉 野寄 弘
本間正一郎 松下 一夫 松下 一雄 宮地 年一
守田 博之 柳本 三郎

圖案科第三學年

伊藤 唯次 内山正二郎 大塚 正二 小宮山由郎
佐々木正次 杉山仁一郎 鈴木 伍市 島山 正男
横井 春光 本多 直次

建築科第三學年

青島 鷹治 内田 保夫 内山 末一 大井 芳郎
大木 清市 小楠千代次 尾高 滿 金田 清一
河島 武 河村 守三 金原 太郎 坂本 誠一
佐藤 庄吉 鈴木 運隆 鈴木 憲之 鈴木 弘一
鈴木 正隆 高木 一 高橋 要一 竹田 行雄
筒井 正惠 中井 幸雄 松原 博司 松下 快治
水野 滿次 村木 隆治 渡邊 英司

昭和六年二月五日印刷
昭和六年二月十一日發行

【非賣品】

發行所 靜岡縣立濱松工業學校
編輯人 榑原助太郎

印刷所 濱松市元城町百七十三番地
印刷人 福田安知

印刷所 株式會社開明堂

發行所 靜岡縣立濱松工業學校

終

